萩原Ⅱ遺跡

北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

萩原Ⅱ遺跡

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

萩原Ⅱ遺跡出土の土器

序

前橋台地を用水や河川が南に向かって流れ、前橋郊外の地を水田地帯と変えています。河川による浅い谷の形成は、古くから台地を居住区と水田区に区分けをし、人々の生活の保証を与えていました。

萩原Ⅱ遺跡はこんな土地の一つであり、古くから人々の生活との関わりが深い土地です。

すぐ東は神沢川により伊勢崎市と境をなしています。今でこそ行政区を分ける垣根となっていますが、かつては萩原Ⅱ遺跡に居住する人々に共通の恵みと災害を与えた自然です。

こんな土地に北関東自動車道路の建設が予定されました。前橋市内においては、本道を群馬県、側道の部分の発掘調査については前橋市が行うことになりました。

発掘調査の結果は、住居址８軒（４世紀１、６世紀２、９世紀１、10世紀３、不明１）と溝址１条、水田址（12世紀）が発見されました。

住居の年代は、長期にわたっていますが、居住区の西側縁沿いに新しい時代の住居があり、東部に入るに従って古くなる傾向になっています。

水田址は浅間Ｂ軽石下のものだけが確認されましたが、隣接して県埋蔵文化財発掘調査事業団が本道の発掘調査を予定しており、更に古い水田址の発見もあるかもしれません。

本道と側道が別々の時期に、加えて発掘調査を行った主体が異なるという中での調査です。そのため、両者の調査結果の付け合わせ等の作業を経て最終的な性格付けを行わなければならない必要が出てきています。

県埋蔵文化財発掘調査事業団が発掘後にその報告書を見ていただければ、統一した報告に近い形でご理解いただけるのですが、その前段階として、本市での側道部分の発掘調査結果の報告として一読いただき、ご指導・ご助言をいただければ幸いです。

平成10年３月25日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　中　西　誠　一

例　　言

1．本報告書は、北関東自動車道側道道路改良事業に伴う萩原Ⅱ（はぎわらに）遺跡発掘調査報告書である。

2．本遺跡の遺跡コードは９Ｅ36である。

3．調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

4．発掘調査の要項は次のとおりである。

調　査　場　所　群馬県前橋市二之宮町2165-１番地他

発掘調査期間　平成９年11月18日～平成９年12月18日

整理・報告書作成期間　平成10年１月５日～平成10年３月25日

発掘・整理担当者　飯田祐二・佐藤則和（前橋市埋蔵文化財発掘調査団発掘調査係）

4．本書の原稿執筆・編集は飯田・佐藤が行った。整理作業をはじめ図版作成には、赤城美代子　阿部シゲ子　岩田　敏子　生形かほる　大塚美智子　鬼塚　成子　神澤とし江　桐谷　秀子　佐野貴恵子　柴崎まさ子　戸丸　澄江　舩津　明美　松田富美子　柳井　晶子　湯浅　道子　綿貫綾子の協力があった。

5．発掘調査にかかわった方々は次のとおりである。（順不同）

阿部シゲ子　石川　　弘　落合　忠雄　鹿沼　国蔵　神澤とし江　桐谷　秀子　桜井　　弘　関口みよ子　高橋　　孜　中村新太郎　奈良　岩雄　原嶋　サイ　福島　逸司　松倉　菊江　矢島アイ子　柳井　晶子

6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図には、建設省国土地理院発行の１／2.5万地形図（大胡）、１／５万地形図（前橋・高崎）と１／2.5千前橋市現形図を使用した。

3．本遺跡の略称は９Ｅ36である。

4．各遺構の略称は次の通りである。

Ｈ…住居址、Ｄ…土坑址、Ｗ…溝址、Ｔ…竪穴状遺構址

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。

遺構　　住居址…１／60、竈址…１／30、水田址…１／250、全体図…１／250

遺物　　土器・石器…１／３、１／４

6．スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構断面図　　構築面…斜線、炭化物・焼土…斑

遺物実測図　　施釉範囲…あられ、須恵器断面…黒塗り

目　　次

序 …… i

例　言 …… ii

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
　1．遺跡の立地
　2．歴史的環境

Ⅲ　発掘調査の方法と経過 …… 5
　1．調査方針
　2．調査過程

Ⅳ　基本層序 …… 7

Ⅴ　遺構と遺物 …… 8

Ⅵ　成果と問題点 …… 13

挿　図

Fig. 1　萩原Ⅱ遺跡位置図 …… v
2　萩原Ⅱ遺跡周辺遺跡図 …… 3
3　萩原Ⅱ遺跡周辺図 …… 5
4　基本土層図 …… 7
5　萩原Ⅱ遺跡全体図 …… 17・18
6　H－1，2号住居址 …… 19
7　H－3，4，6号住居址、竪穴状遺構址、D－4号土坑址 …… 20
8　H－7～9号住居址、D－1～5号土坑址、W－1号溝址 …… 21
9　古墳時代の土器(1) …… 22
10　古墳・平安時代の土器(2) …… 23
11　平安時代の土器(3) …… 24
12　平安時代の土器(4) …… 25
13　石器 …… 26

図　　版

口絵　1　萩原Ⅱ遺跡出土の土器群
ＰＬ．1　Ｂ調査区全景・Ｈ－１～３住居址
ＰＬ．2　Ｈ－２，６，７住居址
ＰＬ．3　Ｈ－６～９住居址
ＰＬ．4　Ｃ・Ｄ・Ｅ調査区
ＰＬ．5　古墳・平安時代の土器
ＰＬ．6　平安時代の土器、石器

表

Ｔab．1　周辺遺跡概要一覧表……4
2　土器観察表……15
3　石器観察表……16
4　水田址計測表……16
5　畦畔集計表……16

抄　　録

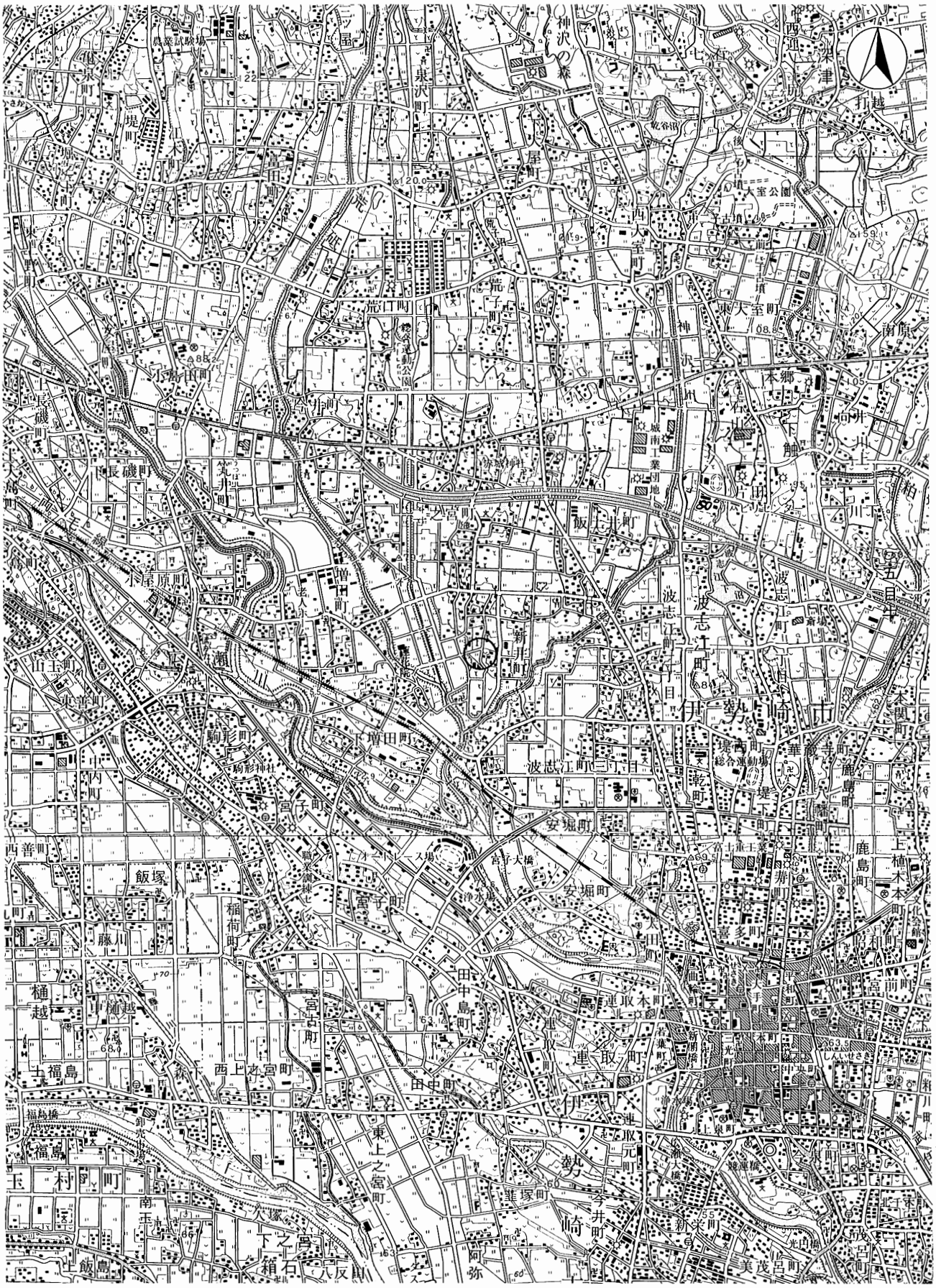


Fig. 1　萩原Ⅱ遺跡の位置

Ⅰ　調査に至る経緯

萩原Ⅱ遺跡の発掘調査は、北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成９年11月から12月にかけて実施された。発掘調査に至る経緯は以下のとおりである。

本遺跡の発掘調査に関して、平成９年６月９日付で前橋市北関東自動車道対策室より二之宮地内の北関東自動車道側道道路改良事業に伴う協議依頼がなされた。調査地は、本線部分を群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行っていることから遺跡地であると考えられた。そこで、10月24日付で調査依頼書の提出を前橋市長に依頼した。その後、前橋市北関東自動車道対策室と協議・調整を行い、10月27日、前橋市長　萩原弥惣治より前橋市教育委員会あてに本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受諾し、11月18日両者の間で本発掘調査の委託契約を締結、11月21日、現地での発掘調査を開始するに至った。

なお、遺跡名称『萩原Ⅱ遺跡』の『萩原』は旧地籍の小字名を採用し、群馬県埋蔵文化財調査事業団が北関東自動車道本道部分を発掘調査していることから遺跡名に『Ⅱ』を付けた。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１　遺跡の立地

萩原Ⅱ遺跡は、前橋市二之宮町萩原に所在する。二之宮町は前橋市の東南部にあたり、遺跡の約600ｍ東を南流する神沢川を隔てて伊勢崎市と接している。前橋市街地からは９㎞程東南方向、伊勢崎市街地からは4.5㎞程北西方向にあたり、北1.7㎞には上野国二宮である二宮赤城神社が鎮座する。この遺跡の西には、荒砥川・宮川・八坂用水、東に神沢川、南に広瀬川と多くの河川が南流している。

赤城山の南麓裾にあたるこの地は、ゆるやかな低台地が広がる中、山腹から流れ出す前記のような中小河川の侵食や山麓末端面からの湧水によって台地は樹枝状に開析され比高差は少ないが沖積地と入り組む複雑な地形となっている。

本遺跡は、標高76ｍ前後の台地の平坦地に立地している。周りは農村地帯であり、周辺は昭和50年代の圃場整備事業や国道17号上武バイパスの建設など開発が行われ、これに伴う発掘調査も広範囲に展開されている。

２　歴史的環境

萩原Ⅱ遺跡の立地する前橋市東南部・荒砥地域には、赤城山南麓の丘陵性台地と沖積地とが入り組み、複雑な地形を呈しており、各時代を通じて数多くの遺跡が残存し発掘調査されている。（Tab.　１参照）本遺跡の遺構・遺物と関連づけられるであろう周辺の歴史的環境をまとめておきたい。

旧石器時代の周辺の遺跡は、飯土井二本松遺跡(3)、飯土井中央遺跡(4)、二之宮谷地遺跡(11)、二之宮道上道下遺跡(12)がある。その他にも暗色帯とその上部から尖頭器を中心に出土した荒砥北三

木堂遺跡(23)、細石刃やナイフ形石器を伴う3枚の文化層が検出された頭無遺跡(24)がある。

縄文時代では、草創期から後期までの遺跡が数多く確認されている。その立地は、沖積地や湧水地に臨む微高地や台地上である。草創期では、荒砥北三木堂遺跡(23)や荒砥北原遺跡、飯土井中央遺跡(4)などがある。早期は、荒砥天之宮遺跡(15)、二之宮千足遺跡(9)、飯土井二本松遺跡(3)、飯土井中央遺跡(4)、今井道上道下遺跡(12)、荒砥北三木堂遺跡(23)、柳久保遺跡群(25)など遺跡数も多くなる。前期は、鶴谷遺跡(27)、荒砥天之宮遺跡(15)、飯土井二本松遺跡(3)、今井道上道下遺跡(12)、二之宮谷地遺跡(11)、柳久保遺跡群(25)などがあり、諸磯期が多く小規模の集落が形成されている。中期は、荒砥天之宮遺跡(15)、飯土井二本松遺跡(3)、二之宮宮東遺跡(6)、今井道上道下遺跡(12)、二之宮谷地遺跡(11)などがあり、加曾利E期が検出されている。後期になると、荒砥天之宮遺跡(15)、荒砥前原遺跡(20)、飯土井二本松遺跡(3)、今井道上道下遺跡(12)などがあり、晩期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代は、荒砥島原遺跡(16)、荒砥前原遺跡(20)、荒口前原遺跡(26)で中期後半の住居址が調査されている。その他中期として、宮川遺跡(19)、頭無遺跡(24)などがある。この時期の立地も、縄文時代同様河川・生産地である沖積地を臨む微高地上や台地上にある。本道部分の萩原遺跡では、竪穴住居址1軒と壺形土器が検出されている。

古墳時代になると、前期は弥生時代後期の小河川に沿って間隔をおく遺跡立地を引き継いでいると考えられる。この荒砥地域は古墳の密集地域として知られるが、前期古墳はない。5世紀中頃にはお富士山古墳(29)、後半に前方後円墳である今井神社古墳(28)が造られ、後期になると国指定史跡となっている西大室の前・中・後の三基の二子古墳をはじめ、数多くの古墳が築造される。集落も前期のものが中後期まで継続するとともに、新たな地点にも形成される。その他に荒砥荒子遺跡や梅木遺跡等で豪族居館址が発見されている。本道部分の萩原遺跡では、4世紀と6世紀の竪穴住居址17軒が検出されている。また、本遺跡西に位置する下増田越渡Ⅱ遺跡では前期の水田址が検出されている。

奈良・平安時代になると台地上に集落が増え、沖積地の水田開発が進む。微高地でも水田化されるとともに、畑作も行われ1108年の浅間B軽石の上下から遺構が検出されている。本道部分の萩原遺跡では、9世紀と10世紀の竪穴住居址22軒を検出している。また、本遺跡東に位置する新井大田関遺跡では、As-B下水田址、9世紀代水田址、9世紀前半の竪穴住居址、溝址が検出されている。西側に位置する下増田越渡遺跡でも818年の洪水層下条里水田址とAs-B下水田址が検出されている。

また、荒砥地域は、古代、勢多郡に属し、東山道のルート上にあると推定されている。推定地付近には、勢多郡の郡衙址と考えられる上西原遺跡があり、延喜式神名帳記載の二宮赤城神社が鎮座する。今井道上道下遺跡(12)ではあづま道が発見され、その北には女堀の遺構がある。

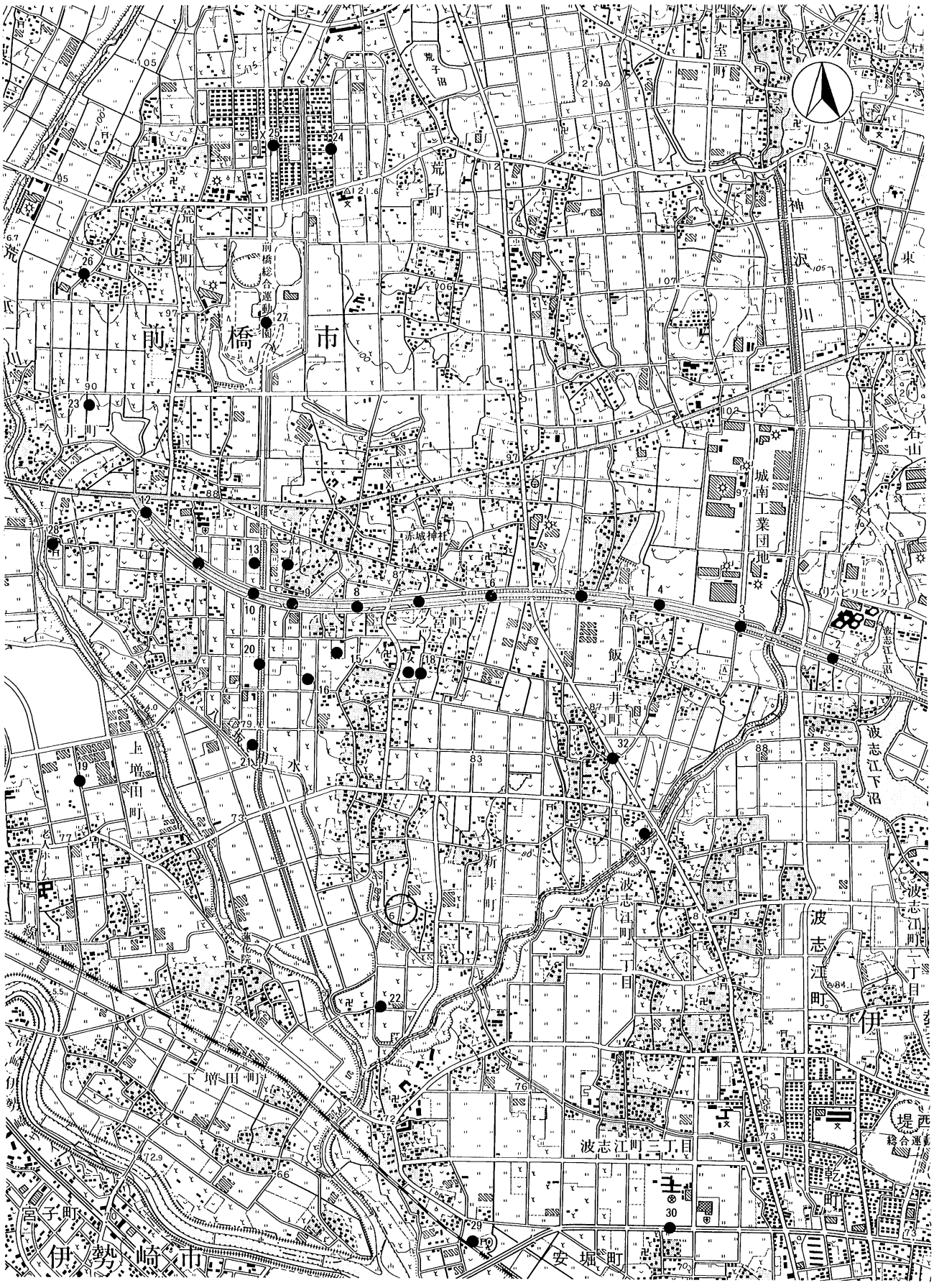


Fig. 2 萩原Ⅱ遺跡周辺遺跡図

Tab. 1　周辺遺跡概要一覧表

番号	遺　跡　名	調査年度	主たる時代	遺跡の概要
1	萩原Ⅱ遺跡	H 9	古墳・平安	住居址・水田址
2	波志江今宮遺跡	S 55・60	縄文・古墳・奈良・平安・近代	住居址・古墳・水田址・炭窯址
3	飯土井二本松遺跡	S 60	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安	住居址
4	飯土井中央遺跡	S 60・61	旧石器・縄文・古墳・中世・近世	住居址
5	飯土井上組遺跡	S 60・61	古墳・平安	住居址
6	二之宮宮東遺跡	S 60・61	縄文・平安・中近世	住居址・水田址
7	二之宮宮下東遺跡	S 62	古墳・奈良・平安・中世	住居址・水田址・中世居館址
8	二之宮宮下西遺跡	S 61	古墳・奈良・平安	住居址・中世居館址
9	二之宮千足遺跡	S 61・62	縄文・古墳・奈良・平安・中世	住居址・水田址
10	二之宮洗橋遺跡	S 61・62	古墳・奈良・平安	住居址
11	二之宮谷地遺跡	S 61・62	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安	住居址・水田址
12	今井道上道下遺跡	S 61・62	旧石器・古墳・奈良・平安・中世	住居址・掘立柱建物址・鍛冶址
13	荒砥洗橋遺跡	S 55	古墳・奈良・平安・近世	住居址・掘立柱建物址
14	荒砥宮西遺跡	S 55	古墳・奈良・平安	住居址　水田址
15	荒砥天之宮遺跡	S 55	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	住居址
16	荒砥鳥原遺跡	S 55	弥生・古墳・奈良・平安	住居址・墓址・水田址
17	荒砥青柳遺跡	S 56	古墳・奈良・平安	住居址・溝址
18	荒砥青柳Ⅱ遺跡	H 6	縄文・古墳・奈良・平安・中近世	住居址・溝址・井戸址
19	中原遺跡群	H 4	古墳・平安・中近世	住居址・水田址・条里大畦畔
20	宮川遺跡	S 55	弥生・古墳・奈良・平安	住居址・墓址・水田址
21	宮原遺跡	S 62	古墳	住居址・円墳
22	荒砥前原遺跡	S 51	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	住居址・円墳

◎その他の遺跡

23　荒砥三木堂遺跡　　24　頭無遺跡　　25　柳久保遺跡群　　26　荒口前原遺跡　　27　鶴谷遺跡

28　今井神社古墳　　29　お富士山古墳　　30中組遺跡　　31　赤石城址　　32　宿畑古墳

Ⅲ　発掘調査の方法と経過

1　調査方針

委託された調査箇所は、幅11ｍの北関東自動車道側道部分４カ所で西からＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区と呼称した。調査箇所は、用地買収の終わっている部分で形状は台形・三角形・長方形等と様々であった。面積はＡ区が40㎡、Ｂ区677㎡、Ｃ区164㎡、Ｄ区251㎡、Ｅ区５㎡総計1137㎡である。グリッドについては、５ｍピッチで西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３‥‥Ｘ40で表し、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３‥‥Ｙ10、と付番し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。なお、Ｘ０・Ｙ０の国家座標は、第Ⅸ系のＹ＝-59,550ｍ、Ｘ＝＋38,900ｍである。また調査は西から表土掘削・遺構確認・杭打ちを行い、東側から遺構掘り下げ・遺構精査・図面作成を行った。そして、全景写真・遺跡全体測量を行った。図面作成は平板・簡易遣り方測量で行い、主要な断面等はスケール1／10で、遺構全体図はスケール1／20で作成した。

2　調査経過

平成９年11月21日、Ｂ調査区西側から重機（バックフォー0.7㎥）による表土掘削を開始した。現耕作土を30～40㎝掘り下げたところで、ソフトロームの地山と遺構面が現れた。翌日から鋤簾かきによる遺構確認を東部から行ったが、西部の確認は難しかった。元の地主の方の話などから、Ｂ区は昭和40年頃は畑地、50年頃は水田、そして54年頃に土地改良を行いまた畑地へ。地目替え、土地改良を行っているため遺構の残りは悪いと考えられた。特に道のあった場所から西部の遺構の残りは悪かった。調査区東部から遺構精査を開始した。土地改良の機械の爪による筋状・格子状のカクランが規則的に入っていた。

Ｂ区の作業と平行して12月１日には、Ｃ調査区の表土掘削を重機（バックフォー0.25㎥）で行った。現地表面下１ｍから浅間Ｂ軽石（1108年降下）の純層が約10㎝の厚さで現れた。その下からは、黒褐色土層の遺構面が検出された。鋤簾による表土除去を行い、翌日までには精査を完了した。南部の遺構の残存状況が特に悪かったが、畦畔を８本確認することができた。

12月２日には、Ｄ調査区西側から重機（バックフォー0.25㎥）による表土掘削を行った。当日、鋤簾かけを行ったが撹乱を受け遺構を見つけることができなかった。また同日、Ｅ調査区にトレンチを入れ遺構確認を行った。溝を確認したが、調査区の面積が狭いため、今後の調査時に再調査することとなった。

Ｂ区の調査は、順調に東部から西部に移行し、住居址・土坑を進めて行った。遺構の残りが悪いと考えられていた旧道路部分より西部からも溝址と４軒の住居址が検出された。そして、12月９日にハイライダーによる全体写真撮影を行った。

全体写真撮影後、Ｂ調査区のＨ２・Ｈ３住居址の床面がまだ20㎝程下がることがわかり、その補足調査と図面作成で数日を要することとなり、現場での発掘調査を終えたのは12月18日であった。そして平成10年１月28日、埋め戻し作業を行い現地における発掘調査を完了した。

平成10年１月５日からは城南収蔵庫で報告書作成に向けて整理作業を行い、３月25日すべての作業を終了することとなった。

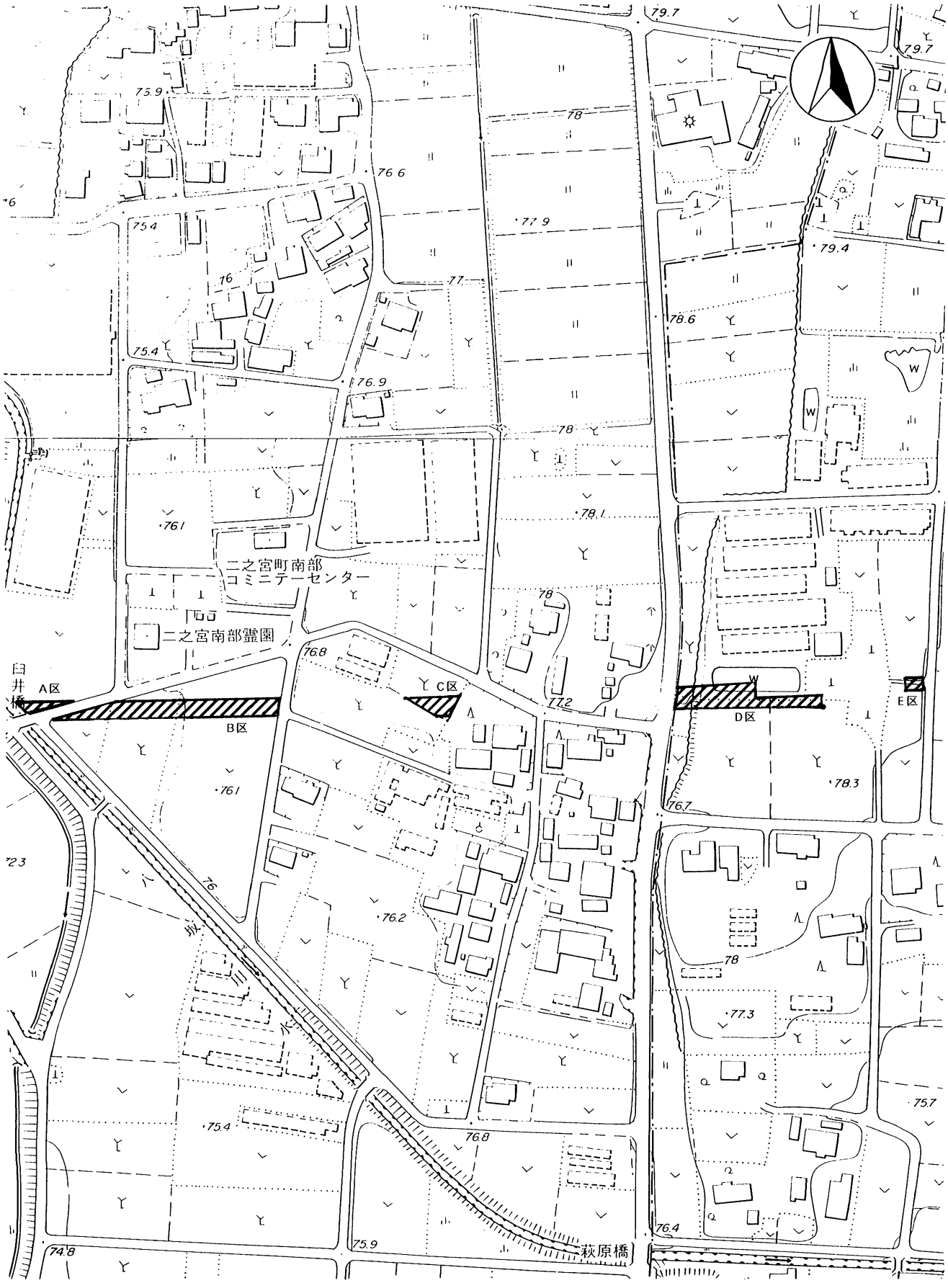


Fig. 3　萩原Ⅱ遺跡周辺図

Ⅳ　基本層序

本遺跡の層序は、台地部と低地である沖積地に二分される。台地部は、近年の圃場整備や耕作に伴い表土層の掘削が行われたため、現耕作土の下がソフトローム面となっている。ソフトロームは、赤城山の山体崩壊土砂が山麓末端部に再堆積して形成されたと考えられている。

本遺跡の層序は、場所によりその堆積状況に違いがあるため、台地部のＢ調査区の南東部区域外、沖積低地のＣ区の二か所の土層図をＦig. ４に示す。なお、Ｄ区は基本的にＢ区と同じ層序でＩ層が25cm、Ⅱ層がＢ区よりも深く続いている。

Ｂ区（Fig. 4左。調査区外、南東部の道路。下水道工事現場）

Ⅰ層　　にぶい褐色細砂層。現耕作土。

Ⅱ層　　黄褐色微砂層。赤城山山体崩壊によるもの。

Ⅲ層　　川砂層。

Ｃ区（Fig. ４右。調査区南西部）

Ⅰ層　　にぶい褐色細砂層。現耕作土。

Ⅱ層　　暗褐色細砂層。浅間Ｂ軽石（Ａｓ－Ｂ：1108年）との混土層。

Ⅲ層　　にぶい赤褐色微砂層。

Ⅳ層　　褐灰色粗砂層。浅間Ｂ軽石純層。明褐色の鉄分凝結あり。

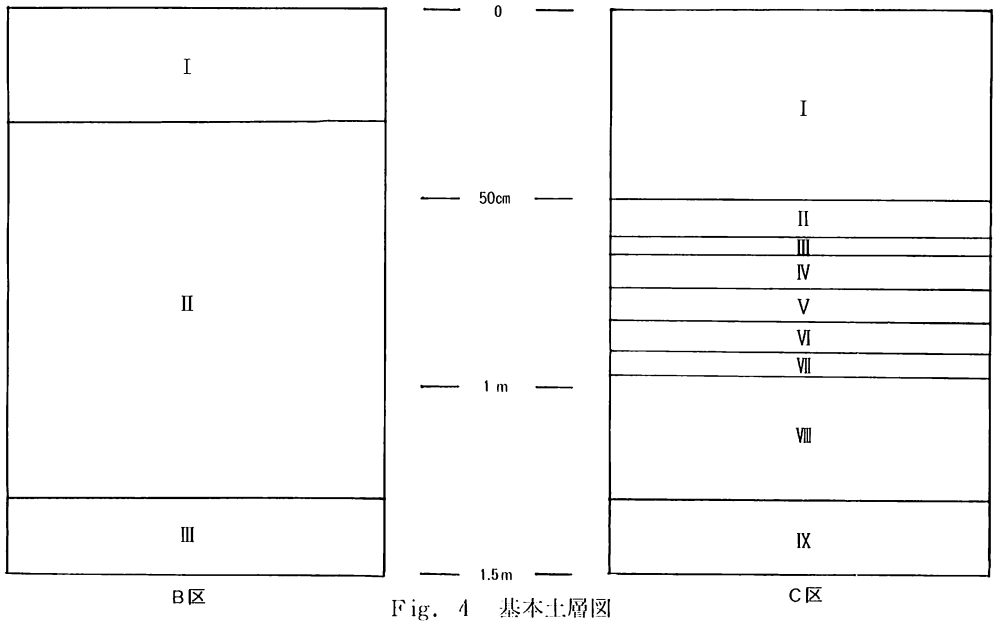
Ⅴ層　　黒褐色微砂層。遺構面。

Ⅵ層　　褐灰色微砂層。浅間Ｃ軽石（Ａｓ－Ｃ：４世紀前葉）を５％含む。

Ⅶ層　　褐灰色微砂層。浅間Ｃ軽石を10％含む。

Ⅷ層　　灰褐色微砂層。オレンジ色の鉄分凝結あり。下部はシルト状。

Ⅸ層　　灰白色シルト層。



Ｆig. ４　基本土層図

V　遺構と遺物

本遺跡の発掘調査では、古墳・平安時代などの住居址８軒、平安時代の水田址８面、その他に竪穴状遺構址１基、土坑址４基、溝址１条が検出された。

遺構は、土地改良が行われていたり畑地と水田の地目変更が行われていたりしたことによる撹乱があって遺存状態は悪かった。また、ソフトロームを掘り込んで作られた住居の床面は堅緻ではなく、確認は非常に難しかった。

１　住居址

Ｈ－１号住居址（Ｂ区、Ｆig. ６，ＰＬ．１）

◎位　置　Ｘ15～16、Ｙ３グリッド　◎面積（4.01㎡）◎方位Ｎ－61°－Ｅ

◎形　状　プランのほとんどが調査区外北であるが、長軸（3.70ｍ）、短軸（2.10ｍ）で方形を呈すると思われる。壁高は平均22㎝を測る。

◎床　面　ほぼ平坦な床面であるが、堅緻面は認められず。柱穴等は検出されず。

◎　竈　　検出されず。

◎遺　物　遺物総数は土師器87点、須恵器４点、うち土師甕２点を図示した。

◎備　考　出土遺物の特徴から、６世紀末と考えられる。

Ｈ－２号住居址（Ｂ区、Ｆig. ６，ＰＬ．２）

◎位　置　Ｘ14～15、Ｙ３～４グリッド　◎面積　15.11㎡　◎方位Ｎ－67°－Ｅ

◎形　状　長軸4.03ｍ、短軸3.83ｍの方形を呈する。壁高は平均36㎝を測る。

◎床　面　ソフトローム面で検出が難しかった。ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

◎　竈　　東壁に設置。全長139㎝、焚口部幅24㎝を測る。

◎貯蔵穴　北東隅より検出。

◎遺　物　遺物総数は土師器345点、須恵器４点、うち土師坏、土師甕、土師甑、土製支脚の９点を図示した。

◎備　考　出土遺物の特徴から、６世紀中期と考えられる。

Ｈ－３号住居址（Ｂ区、Ｆig. ７，ＰＬ．１）

◎位　置　Ｘ13、Ｙ３～４グリッド　◎面積（8.32㎡）◎方位Ｎ－61°－Ｗ

◎形　状　プランの北半分が調査区外のため南北が確定できなかったが、長軸（3.64ｍ）、短軸（2.39ｍ）の方形を呈すると思われる。壁高は浅い部分で４㎝、深い部分が33㎝。

◎床　面　住居東側が一段深く掘り込まれ、二段状となっている。柱穴等は検出されず。

◎　竈　　検出されず。

◎遺　物　遺物総数は土師器75点、須恵器６点、うち土師甕１点を図示した。

◎備　考　出土遺物の特徴から、4世紀と考えられる。しかし、形状が二段状、遺物等も撹乱の影響を受けている可能性があり、検討の余地あり。

H－4号住居址（B区、Fig. 7，PL. 1）

◎位　置　X11～12、Y3グリッド　◎面積（3.65㎡）◎方位N－86°－E

◎形　状　北側が調査区外のため南北が、また、東西もD－4と重複するため確定できないが、長軸（4.05m）、短軸（0.93m）の方形を呈すると思われる。壁高は平均6㎝を測る。

◎床　面　ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

◎　竈　検出されず。

◎遺　物　遺物総数は土師器12点。

◎備　考　出土遺物の特徴からは時代判定はできず、竪穴状遺構となる可能性もある。

H－5号住居址（B区、Fig. 7，PL. 1）

◎プラン確認の際は円形を呈し、住居と思われ付番したが確定できないために竪穴状遺構とした。そのため欠番扱いとなった。

H－6号住居址（B区、Fig. 7，PL. 2）

◎位　置　X4～5、Y3～4グリッド　◎面積（8.71㎡）◎方位N－85°－E

◎形　状　プランの北部が調査区外のため南北が確認できなかったが、長軸（3.50m）、短軸（2.50m）の方形を呈すると思われる。壁高は平均11㎝を測る。

◎床　面　ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

◎　竈　検出されなかったが、北東部に焼土を確認。北竈になる可能性あり。

◎遺　物　遺物総数は土師器114点、須恵器8点、うち土師坏、土師甕、土師墨書片の4点を図示した。

◎備　考　出土遺物の特徴から、9世紀中期と考えられる。

H－7号住居址（B区、Fig. 8，PL. 2）

◎位　置　X3～4、Y3～4グリッド　◎面積　6.36㎡　◎方位N－6°－E

◎形　状　長軸2.66m、短軸2.40mの方形を呈する。壁高は平均21㎝を測る。

◎床　面　ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

◎　竈　東壁に検出。全長90㎝。焚口部幅25㎝を測る。

◎遺　物　遺物総数は土師器200点、須恵器55点、うち土師質高台埦、須恵坏、須恵高台埦、土師甕、土師質甕、土師質羽釜の7点を図示した。

◎備　考　出土遺物の特徴から、H－8より古い10世紀後半と考えられる。

Ｈ－８号住居址（Ｂ区、Ｆig. ８，ＰＬ．３）

◎位　置　Ｘ２～３、Ｙ３～４グリッド　◎面積　11.07㎡　◎方位Ｎ－82°－Ｅ

◎形　状　東部がＨ－７と近接するため確定はできないが、長軸3.44ｍ、短軸3.24ｍの方形を呈すると思われる。壁高は平均16㎝を測る。

◎床　面　ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

◎　竈　　Ｈ－７と東壁の竈部分が重複していたと考えられるが、明確な範囲確定はできず。

◎遺　物　遺物総数は土師器837点、須恵器111点、灰釉陶器3点、うち土師質坏、土師質高台埦、須恵高台埦、土師甕、須恵大甕片の５点を図示した。

◎備　考　出土遺物の特徴から、Ｈ－７より新しい10世紀後半と考えられる。

Ｈ－９号住居址（Ｂ区、Ｆig. ８，ＰＬ．３）

◎位　置　Ｘ２、Ｙ４～５グリッド　◎面積（3.04㎡）◎方位Ｎ－２°－Ｗ

◎形　状　プラン西側が調査区外のため確定できないが、長軸3.31ｍ、短軸（0.97ｍ）の隅丸方形を呈すると思われる。壁高は平均27㎝を測る。

◎床　面　ほぼ平坦な床面。柱穴等は検出されず。

◎　竈　　東壁に検出。全長69㎝。焚口部幅44㎝を測る。

◎遺　物　遺物総数は土師器184点、須恵器51点、灰釉陶器４点、うち土師坏、土師質坏、長頸瓶の４点を図示した。

◎備　考　出土遺物の特徴から、10世紀後半と考えられる。

2　竪穴状遺構址

Ｔ－１竪穴状遺構址（Ｆig. ７，ＰＬ．１）

◎位　置　Ｘ12～13、Ｙ４～５グリッド　◎面積（5.91㎡）◎方位Ｎ－85°－Ｅ

◎形　状　プラン確認時は、長軸3.31ｍ、短軸（0.97ｍ）の円形を呈したが、Ｄ－２と重複。壁高は平均６㎝を測る。南側が区域外。

◎遺構面　ほぼ平坦な床面。

◎遺　物　遺物総数はＤ－２も含めて、土師器126点、須恵器２点、灰釉陶器２点であった。

◎備　考　出土遺物の特徴からは時代判定はできなかった。

3　溝址

Ｗ－１号溝址（Ｆig. ８，ＰＬ．１）

◎位　置　Ｘ７、Ｙ３～５ライン

◎形　状　Ｂ区の西部を南北に横切る形で検出。総延長8.66ｍ、幅0.87ｍ～1.18ｍ、深さ32㎝～50㎝。

◎遺　物　遺物総数は土師器82点、須恵器28点、うち土師質高台埦１点を図示した。

◎備　考　構築時期は、埋土にＡｓ－Ｃ軽石が混じりＡｓ－Ｂ軽石を含まないことや10世紀中頃の土師質須恵埦が出土していることから、同時期もしくはそれ以降Ａｓ－Ｂ降下前と考えられる。

4　土坑址

Ｄ－１号土坑址（Ｆig. ８，ＰＬ．２）

◎位　置　Ｘ14，Ｙ３グリッド

◎形状等　Ｈ－２の北側に位置する。長径1.48ｍ、短径1.02ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さ51㎝を測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。

◎遺　物　総数は土師器９点。

◎備　考　時代判定はできず。

Ｄ－２号土坑址（Ｆig. ７，ＰＬ．１）

◎位　置　Ｘ12，Ｙ５グリッド

◎形状等　プラン確認の際は円形の竪穴状遺構の西隣に位置したが、掘り進めるうちに竪穴状遺構と重複した。南側が区域外。詳しくは竪穴状遺構を参照のこと。

Ｄ－３号土坑址（Ｆig. ８，ＰＬ．１）

◎位　置　Ｘ11～12，Ｙ５グリッド

◎形状等　長径1.28ｍ、短径1.00ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さ32㎝を測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。南側が区域外。

◎遺　物　総数は土師器75点、須恵器１点。

◎備　考　時代判定はできず。

Ｄ－４号土坑址（Ｆig. ７，ＰＬ．１）

◎位　置　Ｘ12，Ｙ３グリッド

◎形状等　長径1.48ｍ、短径0.75ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さ40㎝を測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。Ｈ－４を掘り込む形で重複。北側が区域外。

◎遺　物　総数はＨ－４に含まれる。

◎備　考　時代判定はできず。

Ｄ－５号土坑址（Ｆig. ８，ＰＬ．１）

◎位　置　Ｘ16～17，Ｙ４グリッド

◎形状等　長径1.20ｍ、短径0.74ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さ37㎝を測る。断面はゆるやかな逆台形を呈する。東側が区域外。

◎遺　物　総数は土師器30点、灰釉陶器１点。

◎備　考　時代判定はできず。

5　水田址

◎平安時代（Ｆig. ５，ＰＬ．４）

Ｃ区において水田址が確認できた。現地表面下約60㎝からＡｓ－Ｂテフラ層（浅間Ｂ軽石：1108年）の堆積が約10㎝検出され、その下に黒褐色土の遺構面を約10㎝の厚さで確認できた。精査を進めたが、畦畔の確認は難しかった。８枚の水田址を確認することはできたが、調査区東南部では特に残存状況が悪く畦畔の確認がほとんどできなかった。概して水田面の凹凸は少なく平坦であり、遺物・足跡等は検出されなかった。

Ａｓ－Ｃ（４世紀初頭）混土面での確認も行ったが、水田耕作された形跡はなかった。

6　グリッド出土遺物

Ｂ区のみで出土。小片を含め土師器748点、須恵器27点、灰釉陶器12点が出土した。図示できた遺物は土師坏、土師質甕、土師質羽釜の４点である。圃場整備による撹乱により、離れた遺構・グリッドでも接合し合うものもあった。古墳時代の土師坏・甕から10世紀代の羽釜まで出土した。

Ⅵ　成果と問題点

今回の発掘調査では、古墳時代と平安時代の住居址とＡｓ－Ｂ（浅間Ｂ軽石：1108年）下の水田址が検出された。本遺跡周辺は、荒砥南部圃場整備事業や北関東自動車道建設に伴う大規模な発掘調査が行われ、この地域の歴史が解明されつつある。

以下、今回の発掘調査で明らかになったことを、住居址、水田址の遺構ごとにまとめてみたい。

◎住居址

合計８軒の竪穴住居址を確認した。その全ては、赤城山の山体崩壊に伴う黄褐色微砂層の微高地であるＢ区から検出された。遺構は４・６世紀の古墳時代のものと、９・10世紀の平安時代のものとに大別される。

古墳時代の遺構は、４世紀代の竪穴住居址１軒（Ｈ－３）、６世紀代の竪穴住居址２軒（Ｈ－１，２）をＢ区東部で検出した。Ｈ－２は東竈を有し、主軸は北東方向を向く。土師坏、甕、甑、土製支脚が出土した。Ｈ－３は、三角文・簾状文・波状文の入った土師器の甕の口縁部分が出土した。これから時代判定を４世紀としたが、住居址北半分が調査区外であることや住居址の形状が東側に一段低い段状に掘り込まれているいること、さらには昭和50年代の圃場整備の際の撹乱が調査区内にかなり入っていることから検討の余地がある。

平安時代の遺構は、９世紀代の竪穴住居址１軒（Ｈ－６）、10世紀代の竪穴住居址３軒（Ｈ－７，８，９）と同時期と考えられる溝１条をＢ区西部で検出した。Ｈ－７・８・９はそれぞれ東竈を有し、主軸は東方向を向く。

本調査区のみの住居址の傾向とすると、古墳時代のものが調査区東側から、平安時代のものが西側から検出された。しかし、群馬県埋蔵文化財調査事業団が行った北関東自動車道本線部分の調査の成果と照合してみるとこの傾向はあてはまらない。

今回の調査（Ｂ区）と本道部分の調査を合わせて検出した住居址は、４世紀６軒、６世紀14軒、９世紀15軒、10世紀11軒となる。それぞれの時代の住居の分布のおおまかな傾向は、４世紀は南北方向に点在、６世紀は北東－南西方向に伸び主に北々東の竈、９世紀は東部に集中し主に東竈、10世紀は北西－南東方向に伸び東竈が主である。このような傾向から、時代によって谷地にはさまれた微高地の上に規則性をもって集落が形成され、住居が配置されたと考えられる。

住居址は、４世紀から継続するものでなく、４・６・９・10世紀と間隔を置いて検出されている。また、住居が断絶した５世紀中頃に造られた約1.5㎞南東のお富士山古墳と本遺跡の集落との関係や、周辺の集落遺跡・遺構・水田址の消長等総合的に検討すべき問題点は多い。

◎水田址

８枚の水田址をＣ区で確認した。遺構は、Ａｓ－Ｂ（浅間Ｂ軽石：1108年）による埋没で平安時代のものである。それ以前Ａｓ－Ｃ（４世紀初頭）混土の水田址等の検出はできなかった。

水田址遺構面の標高は、北東部の76.30ｍを最高点で南部の76.10ｍを最低点とする。比高差0.2ｍ、北東から南西へ約15／1000の勾配がある。調査区範囲が側道の一部で164㎡と狭いため、水田区画については完全に一区画をなす水田は検出されなかった。水田址の区画は、完全に一区画をなす水田址が検出されなかったため断定はできないが、方形・台形の面積の少ないものと想定できる。

畦畔は直線であるが方向の規則性をもたず、畦畔の交点は直行しないでＴ字形に交わっている。

畦畔の残存状況は東南部が特に悪く、形状は後世の圧縮により全体的に偏平な台形状、またはカマボコ形に変形しており、高さは１～３㎝、下幅は56～82㎝、上幅は26～42㎝である。これらの水田址は、東側を流れる小河川によって侵食されたわずかな沖積低地を地形に合わせた形の不定形の水田にし、耕作していたと考えられる。

配水については水口が検出されなかったためわからないが、同時代の水田址などから上の水田から下へ水をオーバーフローさせ順次標高の低い水田に流し込む、「かけ流し」の方法がとられていたと考えられる。水の流れは、標高の高い北東方向から低い南西方向に流れていたと思われる。

◎住居址と水田址の関係

今回の調査では、平安時代遺構面で住居址（Ｂ区）・水田址（Ｃ区）の検出はできた。この水田址は、台地を開析した河川の谷地に作られた不定形のもので比較的狭い面積のものである。古墳時代の住居址の検出はできたが、水田址の検出はできなかった。しかし、荒砥川に合流する宮川左岸低地に位置し、本遺跡の西側に隣接する下増田越渡遺跡で、古墳時代前期（Ａｓ－Ｃ後）と平安時代（Ａｓ－Ｂ下）の水田址が検出され、東隣の新井太田関遺跡でも、平安時代（Ａｓ－Ｂ下）の水田址が検出され、それ以前の水田耕作も想定されている。

このことから、本遺跡の集落とＣ区の水田址・下増田越渡遺跡・新井太田関遺跡は集落と生産域との関係であったと考えられる。また、水田址の検出時期と住居址の検出が途切れる時代（５，７世紀）との間にも何らかの関係があったことも想定できる。

◎まとめ

以上のことから本遺跡をまとめてみる。

・住居址は、４・６・９・10世紀のもので時代の間隔をおいて検出される。
・Ｃ調査区は、Ａｓ－Ｂ（浅間Ｂ軽石）によって埋没した平安時代の水田址である。
・水田址は、谷地状の傾斜の大きい場所に作られた不定形のものである。
・Ｂ調査区の住居址の分布状況は、それぞれの時代によっておおまかな規則性をもつ。
・Ｂ調査区の住居址とＣ調査区の水田址、あるいは西隣の下増田越渡遺跡、東隣の新井太田関遺跡の水田址は、集落と生産域の関係であり、お富士山古墳との関係も考えられる。

今回の発掘調査は、北関東自動車道の側道部分のみという調査範囲の限られたものであった。今後は、本線部分の調査結果との照合・考察も必要となる。その結果、面としての遺跡の位置付けが可能となるであろう。多くの問題点が浮かび上がった調査であったが、今後の調査の進行により、より明確な結論が導き出され、地域の歴史が一層解明されることを期待したい。

参考文献

『年報』16　群馬県埋蔵文化財調査事業団　1997
『六供下堂木Ⅱ遺跡』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1997
『中原遺跡群』　前橋市埋蔵文化財発掘調査団　1992～1995
『荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡』　群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
『地域をつなぐ　未来をつなぐ』－上武道路埋蔵文化財22年の軌跡－
群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995

Tab. 2　土器観察表

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	Fig.
1	H－1	土師甕	14.4	－	①中粒②良好③にぶい橙④1／6	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。		9
2	H－1	土師甕	15.2	－	①細粒②良好③にぶい橙④2／5	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。		9
3	H－2	土師坏	13.8	6.5	①中粒②良好③橙④3／4	ほぼ直立。横撫で。篦削り	篦削り。		9
4	H－2	土師坏	12.4	6.1	①細粒②良好③赤④1／2	ほぼ直立。横撫で。	篦削り。	外稜あり。	9
5	H－2	土師坏	13.3	5.8	①細粒②良好③橙④4／5	外傾。横撫で。	篦削り。	外稜あり。	9
6	H－2	土師甕	－	－	①細粒②良好③にぶい橙④1／5	欠損。　篦削り。	篦削り。		9
7	H－2	土師甕	(20.8)	－	①細粒②良好③にぶい橙④1／8	外反。横撫で。篦削り。	欠損。		9
8	H－2	土師甕	－	－	①細粒②良好③灰褐④底部のみ	欠損。　篦磨き。	篦削り。		9
9	H－2	土師甕	－	－	①中粒②良好③橙④底部のみ	欠損。　篦削り。	篦削り。		10
10	H－2	土師甑	－	－	①細粒②良好③にぶい橙④底部1／5	外反。横撫で。篦削り。	欠損。	内面篦磨き。	10
11	H－2	土製支脚	－	10.1	①中粒②良好③橙④2／5	側外面に指頭痕。	脚部横撫で。	カマド支脚。	10
12	H－3	土師甕	－	－	①細粒②良好③橙④口縁部1／5	外傾。三角文。簾状文。波状文。	欠損。		10
13	H－6	土師坏	(12.1)	3.4	①細粒②良好③橙④1／4	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		10
14	H－6	土師坏	12.1	3.1	①細粒②良好③明赤褐④完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		10
15	H－6	土師甕	18.4	－	①細粒②良好③にぶい赤褐④1／4	外反。横撫で。篦削り。	欠損。		10
16	H－6	土師片	－	－	①細粒②良好③にぶい橙④——	欠損。	欠損。	内外面に墨書。	10
17	H－7	土師質高台埦	12.9	5.6	①中粒②良好③橙④2／3	外傾。轆轤。	回転糸きり後付け高台。		10
18	H－7	須恵坏	12.7	4.5	①細粒②良好③灰④1／3	外反。轆轤。	回転糸きり未調整。		10
19	H－7	須恵高台埦	16.6	5.8	①細粒②極良③灰白④1／4	外傾。轆轤。	削り出し高台。	灰釉。虎渓山。	10
20	H－7	土師甕	(18.2)	－	①細粒②良好③橙④1／4	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。		11
21	H－7	土師質甕	22.2	－	①細粒②良好③橙④1／2	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	土釜。	11
22	H－7	土師質羽釜	19.8	－	①細粒②良好③橙④2／5	内傾。轆轤。	欠損。	鍔三角形。	11
23	H－7	土師質羽釜	(27.3)	－	①細粒②良好③にぶい橙④1／5	直立。轆轤。	欠損。	鍔三角形。	11
24	H－8	土師質坏	12.0	－	①細粒②良好③にぶい赤褐④完形	外傾。轆轤。	回転糸きり未調整。		11
25	H－8	土師質高台埦	(14.9)	5.4	①細粒②良好③にぶい黄橙④2／3	外傾。轆轤。	回転糸きり付け高台。		11
26	H－8	須恵高台埦	(13.7)	5.1	①細粒②良好③灰黄褐④2／3	外傾。轆轤。	回転糸きり付け高台。		11
27	H－8	土師甕	(21.7)	－	①細粒②良好③にぶい橙④1／4	外反。横撫で。篦削り。	欠損。		12
28	H－8	須恵甕	－	－	①細粒②極良③黒④口縁部1／10	口唇部に縁帯。波状文。	欠損。		11
29	H－9	土師坏	12.0	3.8	①中粒②良好③橙④4／5	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		12
30	H－9	土師質坏	13.2	4.4	①中粒②良好③褐灰④5／6	外反。轆轤。	回転糸きり未調整。	内外面にスス付着	12
31	H－9	土師質坏	12.4	3.8	①中粒②良好③明褐灰④完形	外反。轆轤。	回転糸きり未調整。	内外面にスス付着	12
32	H－9	長頸瓶	－	－	①細粒②極良③オリーブ灰④口縁部1／5	口唇部内外面に縁帯。外部欠損	欠損。	灰釉。	12
33	W－1	土師質高台埦	13.8	4.4	①細粒②良好③灰黄④完形	外反。轆轤。	回転糸きり付け高台。	内外面にスス付着	12
34	X 8，Y 4	土師質羽釜	17.2	－	①細粒②良好③灰白④1／8	内傾。轆轤。	欠損。	鍔三角形。	12
35	X10，Y 4	土師坏	13.9	4.7	①細粒②良好③橙④1／6	外傾。横撫で。	篦削り。	外稜あり。	12
36	X10，Y 4	土師質甕	16.2	－	①細粒②良好③橙④口縁部1／4	外反。横撫で。	欠損。		12
37	X 7，Y 5	土師質羽釜	20.9	－	①細粒②良好③淡黄④1／7	内傾。轆轤。	欠損。	口唇部外反。鍔三角形。	12

註）表の記載は以下の基準で行った。

①胎土は、細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0～1.9㎜ 以下）、粗粒(2.0㎜以上)とした。

②焼成は、極良、良好、不良の３段階。

③色調は、土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976）によった。

④大きさの単位はcmであり、現存値を記載した。

Ｔａｂ．３　石器観察表

番号	出土位置	器　種	長	幅	厚	重さ	石　材	備　　考	Fig
1	Ｈ－９	磨石	13.0	10.8	4.4	900ｇ	玄武岩	周囲・偏平面に使用痕	13
2	Ｈ－９	凹石	14.6	11.9	3.5	774ｇ	泥　岩		13
3	Ｈ－９	凹石	9.1	10.0	1.8	240ｇ	泥　岩	裏面・下部欠損	13
4	Ｈ－９	石皿	16.5	14.2	3.9	1.1kg	石英閃緑岩		13
5	Ｈ－７	竈袖石	25.7	17.2	11.8	4.9kg	角閃石安山岩	上下面以外に加工痕	13
6	Ｈ－８	砥石	9.8	4.3	3.2	290ｇ	砥沢石	すべての側面に使用痕あり	13

註）表の記載で、長さ・幅・厚さの単位はcmである。

Ｔａｂ．４　水田址計測表

番号	面　積 m^2	東　畦 m	西　畦 m	南　畦 m	北　畦 m	形　　状
1	(10.49)	(3.10)	――――	(7.18)	――――	方形
2	(13.24)	(1.82)	――――	――――	(7.18)	方形
3	(11.82)	(3.80)	(1.46)	5.10	――――	台形
4	(26.45)	(5.78)	(3.44)	――――	5.10	台形
5	(25.22)	(3.48)	(1.02)	8.40	――――	方形
6	(20.36)	(8.64)	(9.44)	――――	3.96	台形
7	(――)	(2.90)	(8.64)	――――	3.92	
8	(――)	――――	(2.90)	――――	(0.66)	

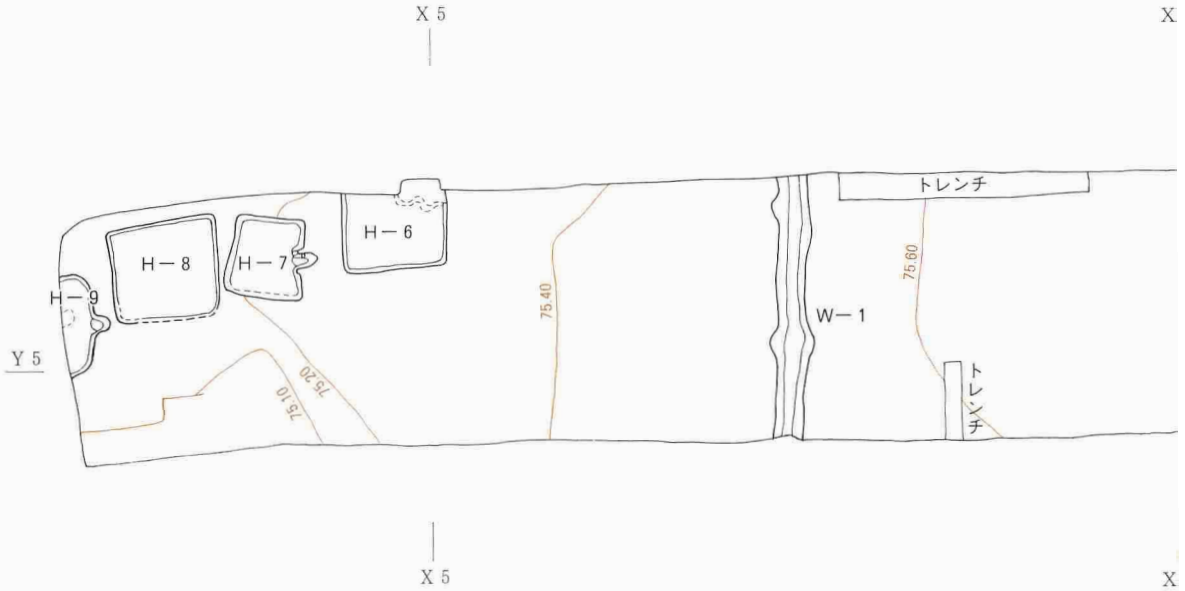
註）水田址計測・畦畔一覧表の記載は以下の基準で行った。

①水田址面積の算出については１／40の縮尺でプラニメーター（ローラー極式・レンズ式）による３回計測平均値を使用した。なお、少数点以下３桁は四捨五入した。

②水田址の面積・各畦畔の長さの確認値は（　）で示した。

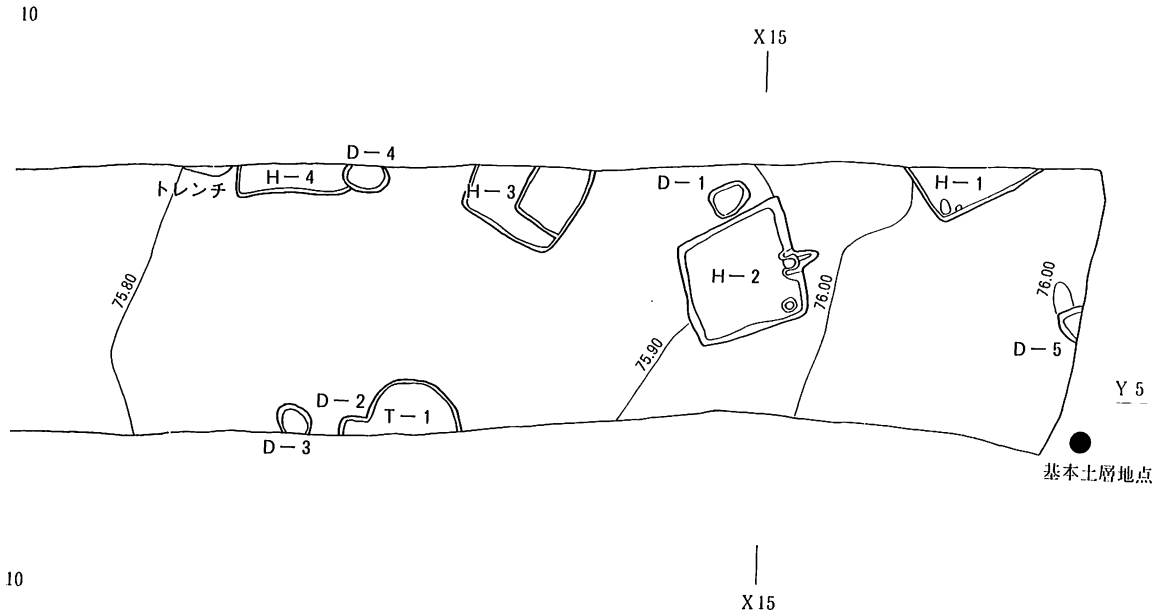
Ｔａｂ．５　畦畔集計表

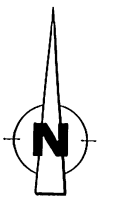
番号	グリッド X　Y	方　位 N－　°－	上　幅	下　幅 cm	高　さ cm	方　向
1	X30　，Y３	N－30°－E	２８	６０	1	南北
2	X29～30，Y３	N－68°－W	２６	５８	1	東西
3	X30～31，Y３	N－71°－W	２５	５６	2	東西
4	X31　，Y２～４	N－13°－E	２９	６０	1	南北
5	X31～33，Y２～４	N－53°－W	４２	８２	2	東西
6	X31～33，Y３～４	N－31°－E	２６	５８	2	南北
7	X32～33，Y３～４	N－29°－E	４０	７５	2	南北
8	X33　，Y３	N－33°－E	――――	――――	3	南北

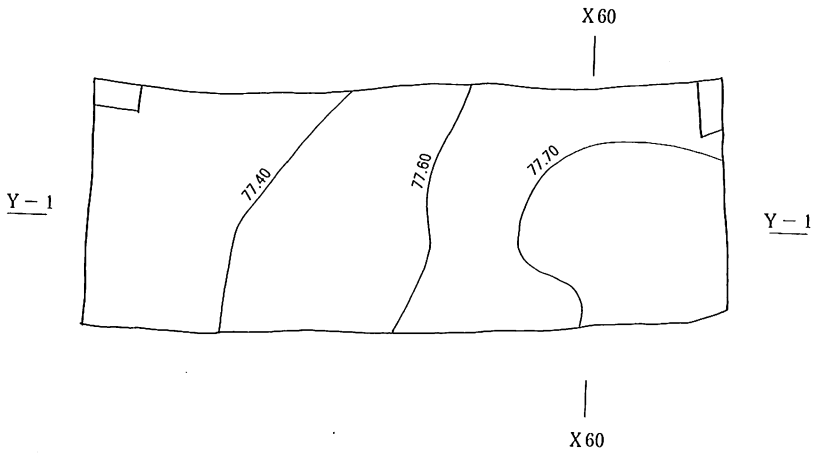

X 5
X
トレンチ
H－6
H－8
H－7
H－9
75.40
75.60
W－1
Y 5
75.20
75.10
トレンチ
X 5
X

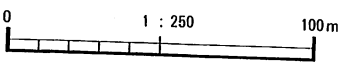
X30
基本土層地点
2
1
4
1
3
5
76.25
76.30
2
3
76.10
76.15
8
4
6
7
76.20
8
76.10
7
Y 4
Y 4
6
X30

Fig. 5　萩原Ⅱ遺跡

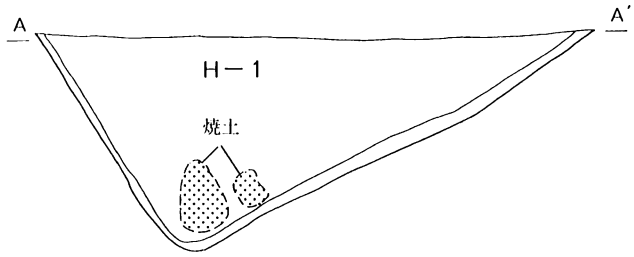

10
X15
D－4
トレンチ
H－4
H－3
D－1
H－1
H－2
75.80
76.00
76.00
75.80
D－5
D－2
T－1
D－3
Y 5
基本土層地点
10
X15

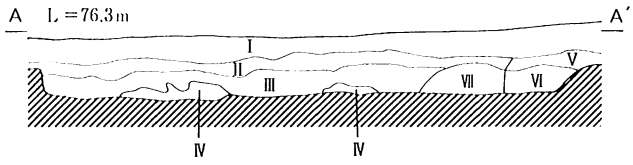

N


X60
Y－1
77.40
77.60
77.70
Y－1
X60


0
1 : 250
100m

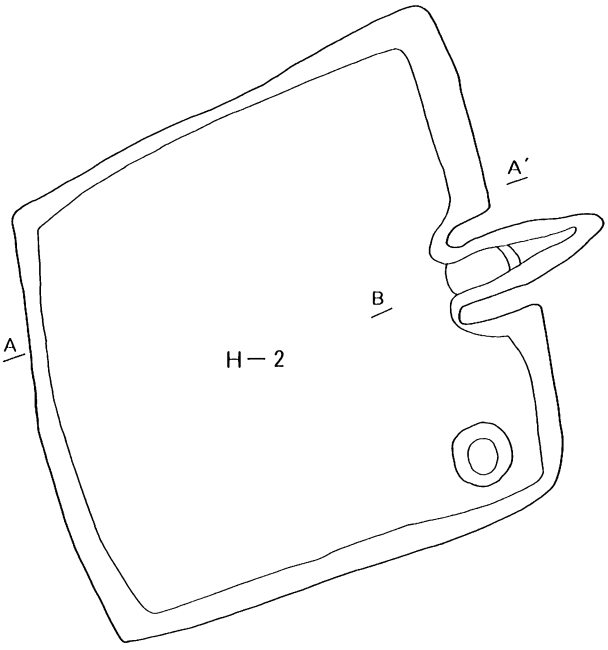
全体図

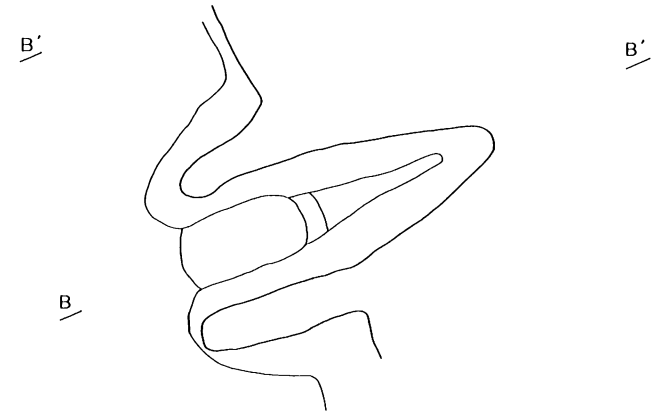


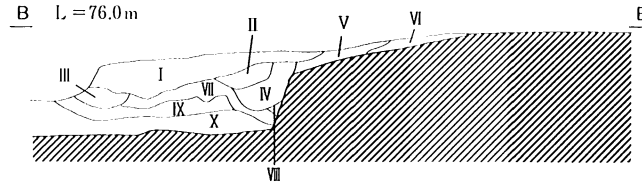


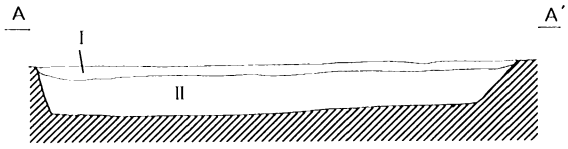
H－1号住居址

Ⅰ層	にぶい褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。現耕作土。
Ⅱ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりあり。As-Cを3％含む。
Ⅲ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。As-Cを5％含む。
Ⅳ層	黄褐色粗砂層	粘性なし・締まりあり。ロームブロックφ5㎝を50％含む。
Ⅴ層	にぶい黄褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。As-Cを3％、焼土粒φ5㎜を30％含む
Ⅵ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。焼土粒φ7㎜を7％含む。
Ⅶ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。焼土粒φ7㎜を3％含む。
Ⅷ層	褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。地山。赤城山山体崩壊に









H－2号住居址

Ⅰ層	にぶい褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。現耕作土。
Ⅱ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。サラサラのソフトローム。

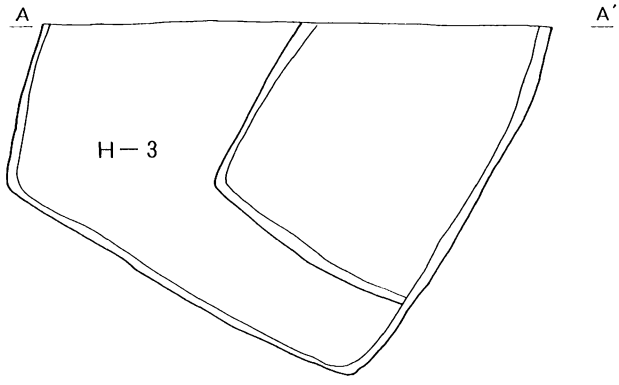
H－2号住居址竈

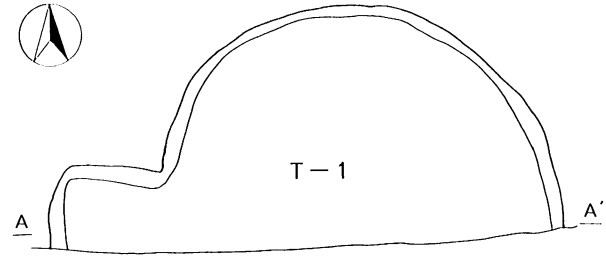
Ⅰ層	にぶい褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。焼土ブロックφ5㎜を3％含む。
Ⅱ層	橙色細砂層	粘性なし・締まりなし。焼土。ブロックをを含みやわらかい。
Ⅲ層	にぶい橙色細砂層	粘性なし・締まりなし。焼土。
Ⅳ層	にぶい黄橙色細砂層	粘性なし・締まりあり。
Ⅴ層	灰黄色細砂層	粘性なし・締まりなし。サラサラ。
Ⅵ層	にぶい黄褐色細砂層	粘性なし・締まりあり。焼土ブロックφ2㎜を3％含む。
Ⅶ層	赤褐色細砂層	粘性なし・締まりあり。焼土ブロックφ2㎝を20％含む。
Ⅷ層	褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。焼土ブロックφ3㎜を3％含む。
Ⅸ層	にぶい赤褐色細砂層	粘性なし・締まりあり。堅い焼土。焼土ブロックφ5㎝を50％含む。
Ⅹ層	にぶい黄褐細砂層	粘性なし・締まりなし。サラサラの地山。

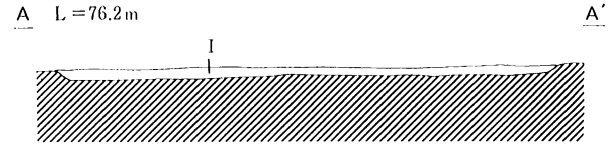
0　1／60　2 m

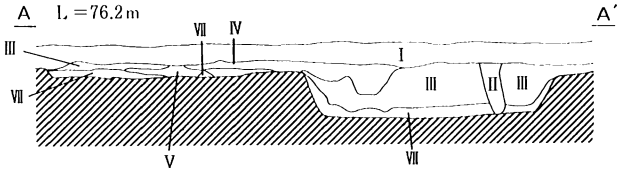
0　1：30　1 m

Fig. 6　H－1・2号住居址





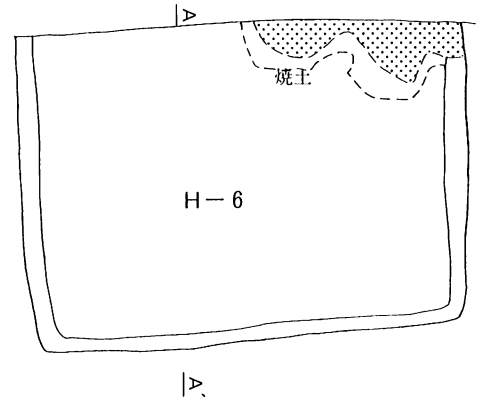


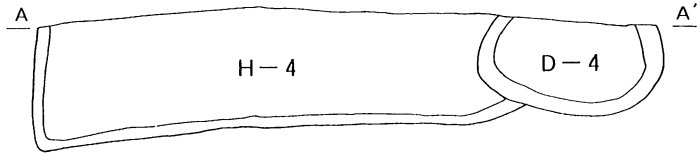


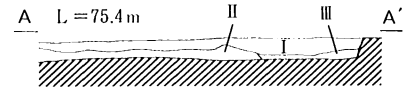
T－1号竪穴状遺構
Ⅰ層　黒褐色細砂層　　粘性なし・締まりややあり。

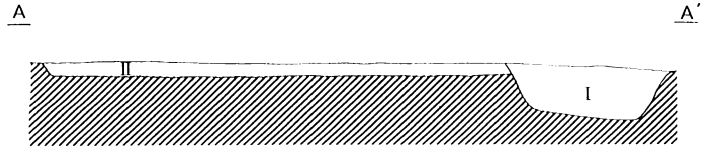
H－3号住居址

Ⅰ層	にぶい褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。現耕作土
Ⅱ層	黒褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cφ1㎜を25％含む。
Ⅲ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。As-Cφ1㎜を5％含む。 褐色ブロックφ3㎝を数個含む。
Ⅳ層	褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。
Ⅴ層	黒褐色細砂層	粘性あり・締まりあり。As-Cφ1㎜を1％含む。
Ⅵ層	黒褐色細砂層	粘性なし・締まりあり。
Ⅶ層	暗褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。
Ⅷ層	にぶい黄褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。サラサラ。
Ⅸ層	褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。地山。赤城山山体崩壊によるローム。









H－6号住居址

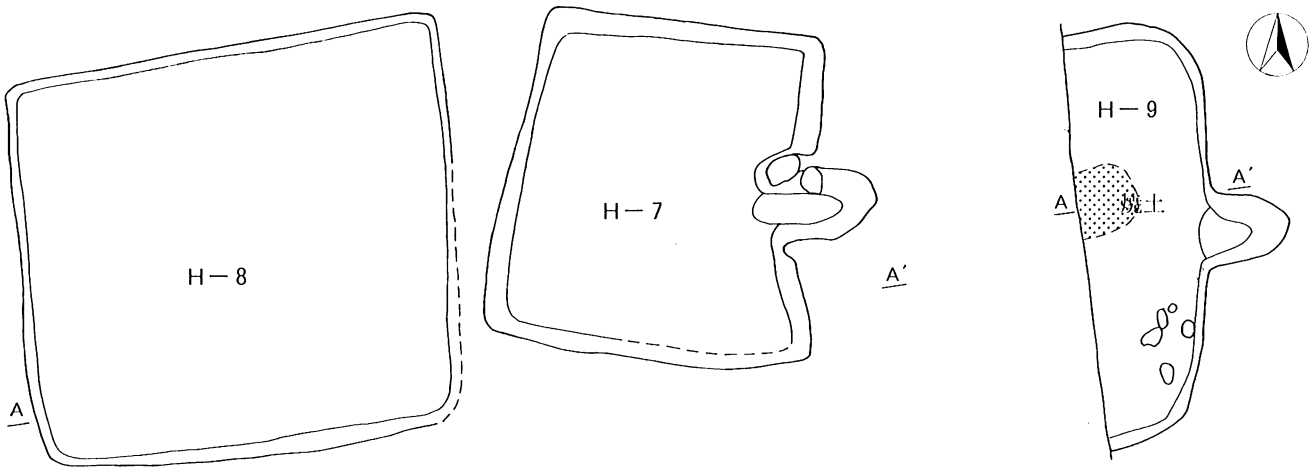
Ⅰ層	黒褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。
Ⅱ層	黒褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。 As-Cφ1㎜を3％含む。
Ⅲ層	褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。サラサラ。

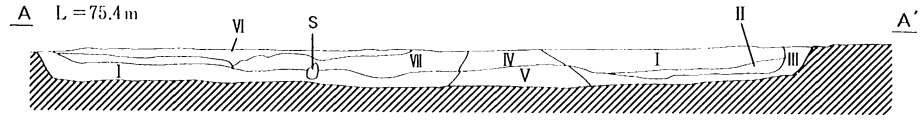
H－4号住居址

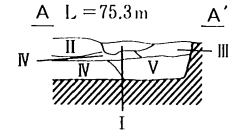
Ⅰ層	にぶい褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。現耕作土
Ⅱ層	黒褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。

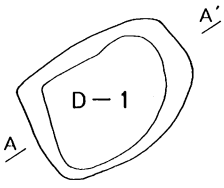
0　1／60　2 m

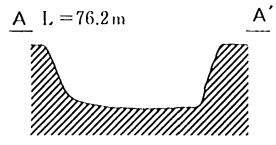
Fig. 7　H－3・4・6号住居址、竪穴状遺構址　D－4土坑址









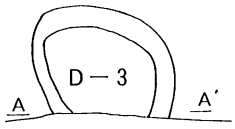


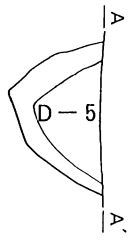
H－7・8号住居址

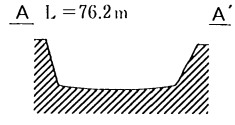
Ⅰ層	黒褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを15%含む。 灰白ブロックφ1㎝大を5%含む
Ⅱ層	黒褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。
Ⅲ層	褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。 下部ではφ2～5㎝の河原石を含む。
Ⅳ層	黒褐色細砂層	粘性なし・締まりあり。As-Cを5%含む。
Ⅴ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりなし。
Ⅵ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりあり。
Ⅶ層	暗褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを10%含む。 焼土ブロックφ5㎜を5%含む。
Ⅷ層	黒褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを5%含む。

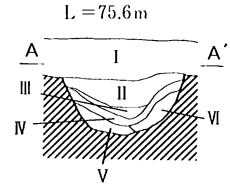
H－9号住居址

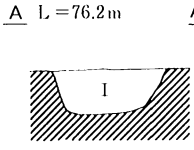
Ⅰ層	にぶい黄褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを5%含む。
Ⅱ層	暗褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを10%含む。
Ⅲ層	黒褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを10%含む。 焼土ブロックφ3㎜を5%含む。
Ⅳ層	黒褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを5%含む。 焼土ブロックφ3㎜を5%含む。
Ⅴ層	暗褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを5%含む。







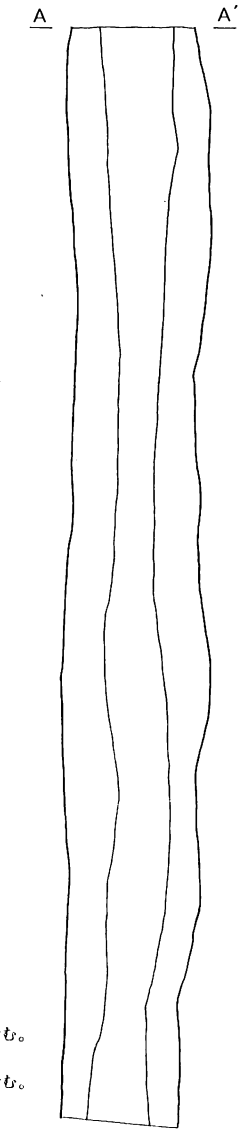




D－1・3・5号土坑

Ⅰ層	黒褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。

W－1号溝

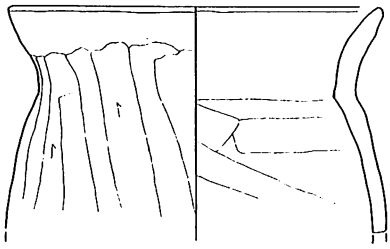


W－1号溝址

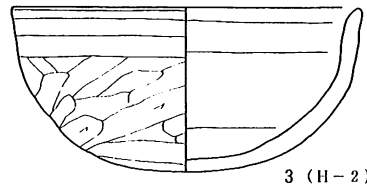
Ⅰ層	にぶい褐色細砂層	粘性なし・締まりややあり。現耕作土。
Ⅱ層	暗褐色細砂層	粘性なし・締まりあり。As-Cをφ5㎜を10%含む。
Ⅲ層	にぶい黄褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cを1%含む。
Ⅳ層	暗褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cをφ1㎜を5%含む。
Ⅴ層	にぶい黄褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。
Ⅵ層	黒褐色細砂層	粘性ややあり・締まりあり。As-Cをφ3㎜を5%含む。

0　1／60　2m

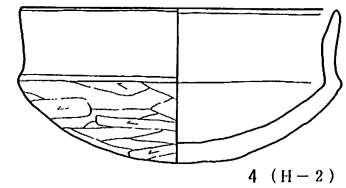
Fig. 8　H－7～9号住居址、D1～5号土坑址、W－1号溝址



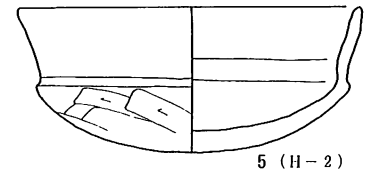
1（H－1）



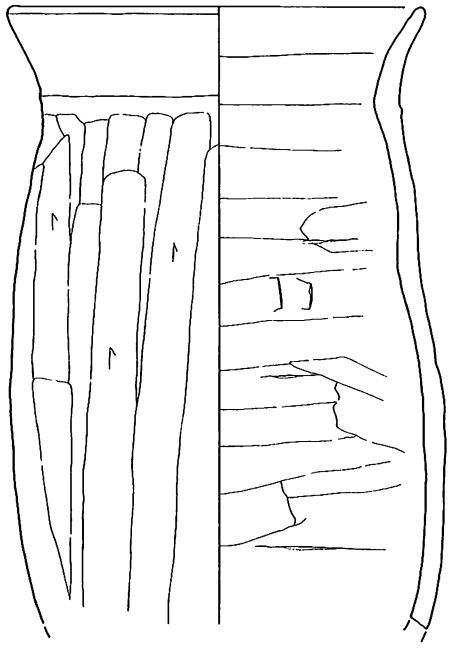
3（H－2）



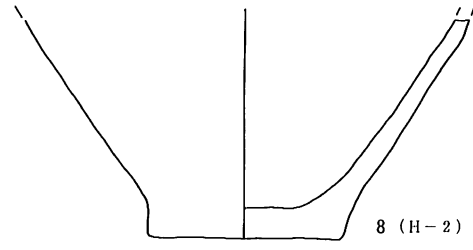
4（H－2）



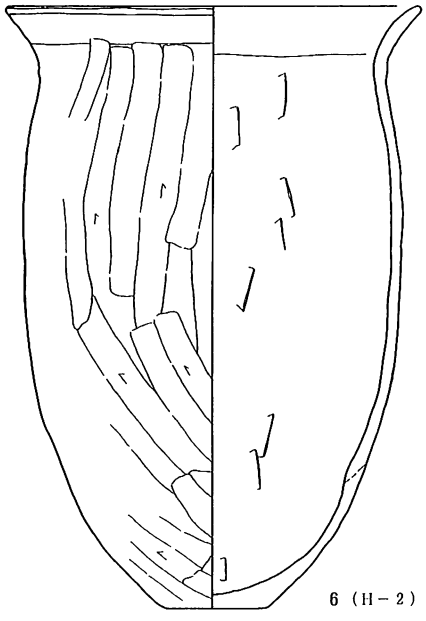
5（H－2）



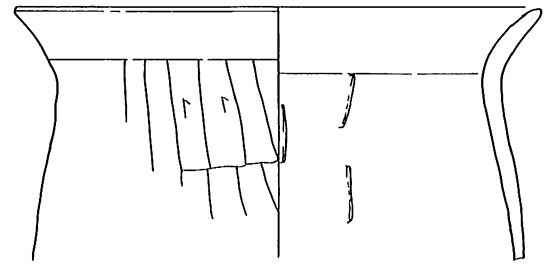
2（H－1）



8（H－2）



6（H－2）



7（H－2）

0　1：4　10cm
（6）

0　1／3　10cm
（1～5・7・8）

Fig. 9　古墳時代の土器(1)

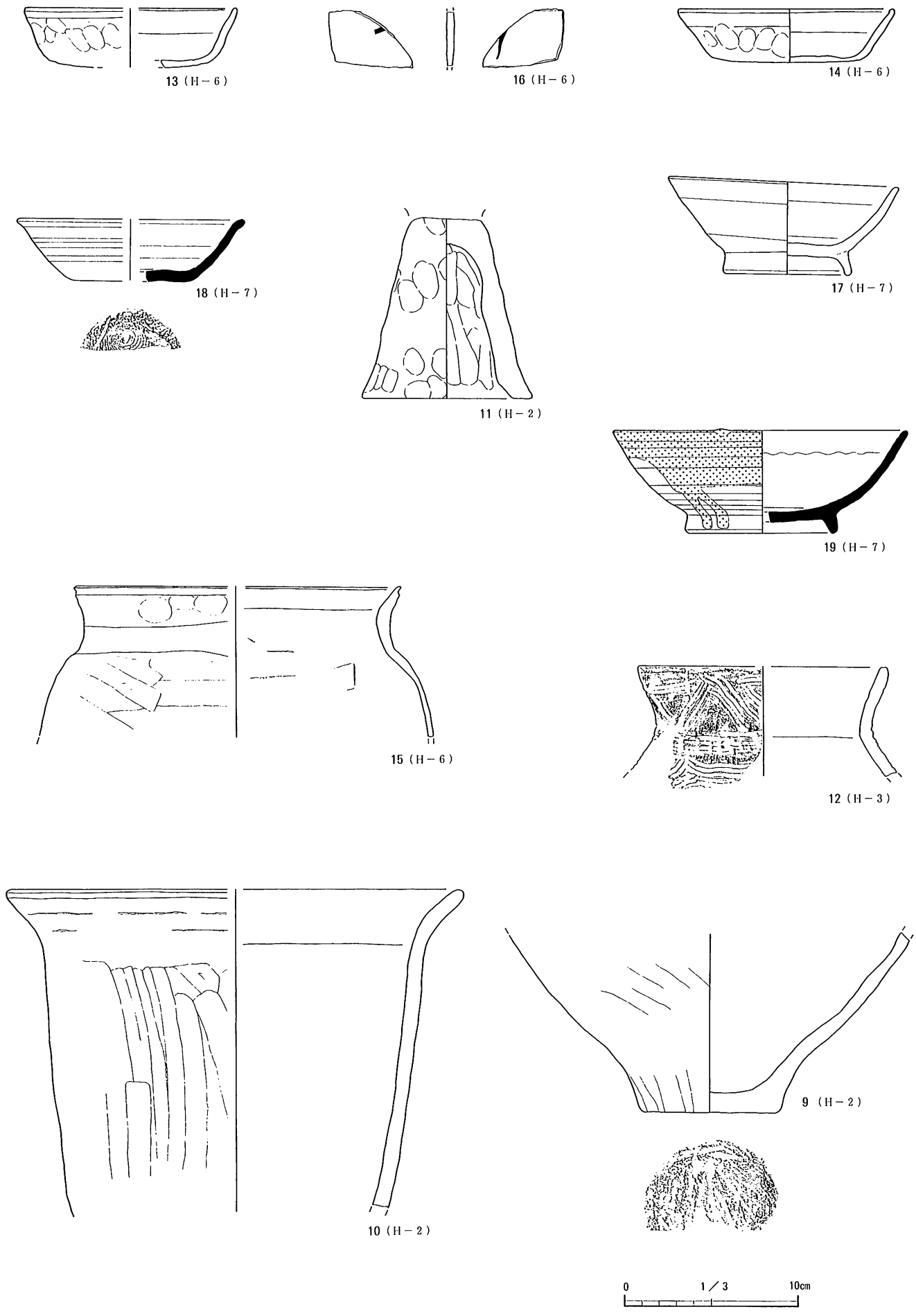
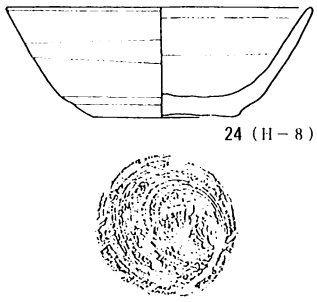
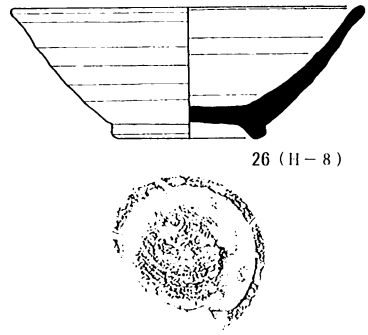
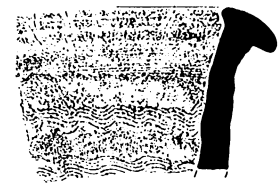
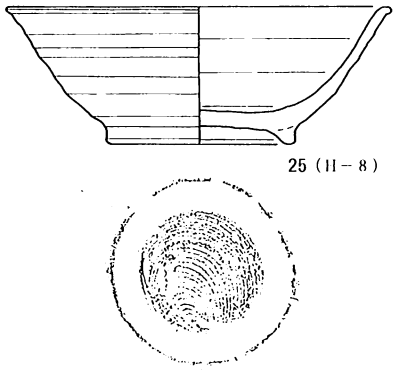


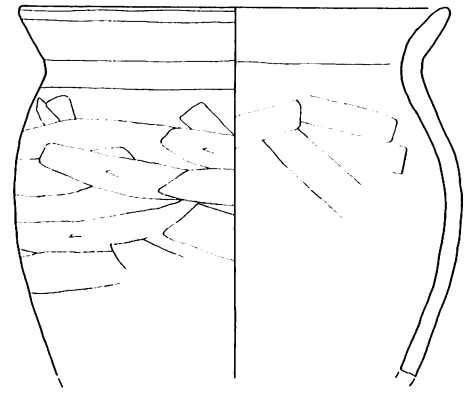
Fig. 10　古墳・平安時代の土器(2)

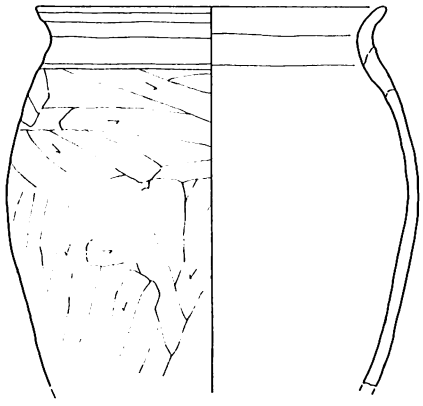

24（H－8）

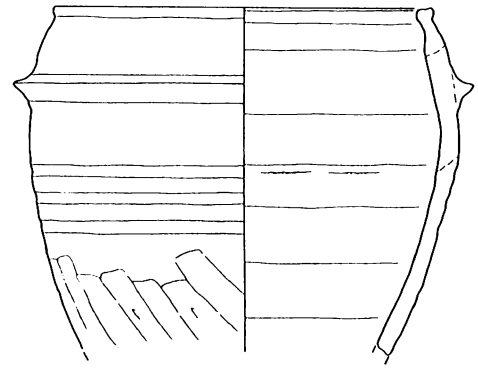

26（H－8）

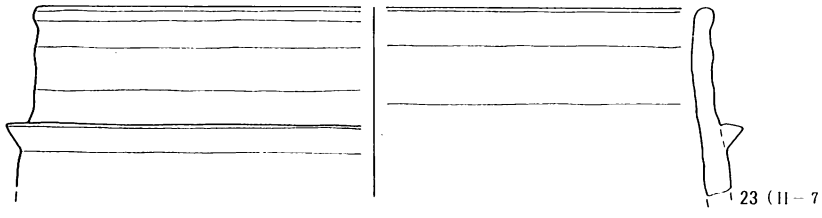

28（H－8）


25（H－8）


21（H－7）


20（H－7）


22（H－7）


23（H－7）

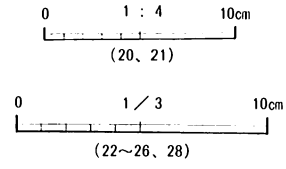
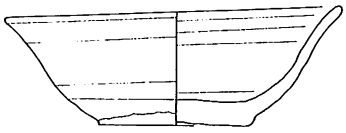
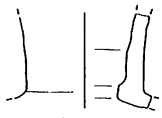


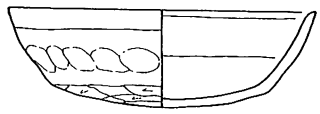
Fig. 11　平安時代の土器(3)



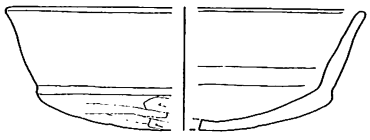
30（H－9）



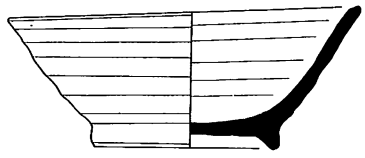
32（H－9）



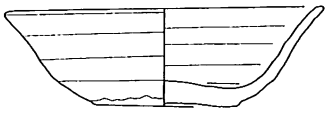
29（H－9）



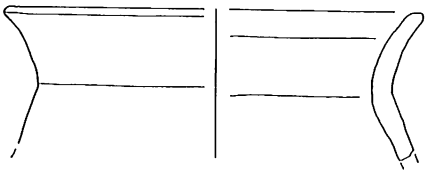
35（X10Y4）



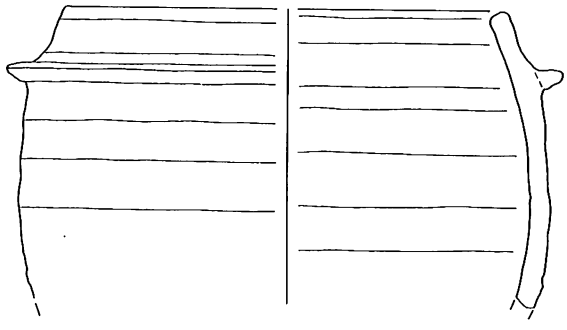
33（W－1）



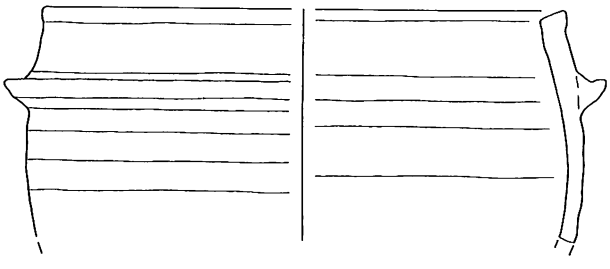
31（H－9）



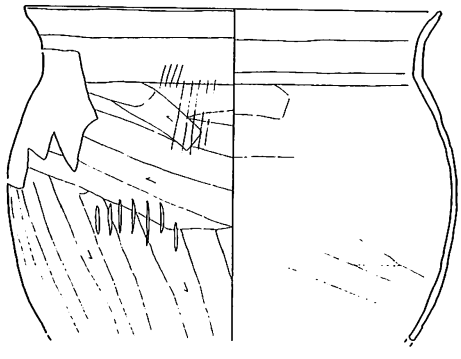
36（X10Y4）



34（X8Y4）



37（X7Y5）



27（H－8）

0　1：4　10cm
(27)

0　1／3　10cm
(29～37)

Fig. 12　平安時代の土器(4)

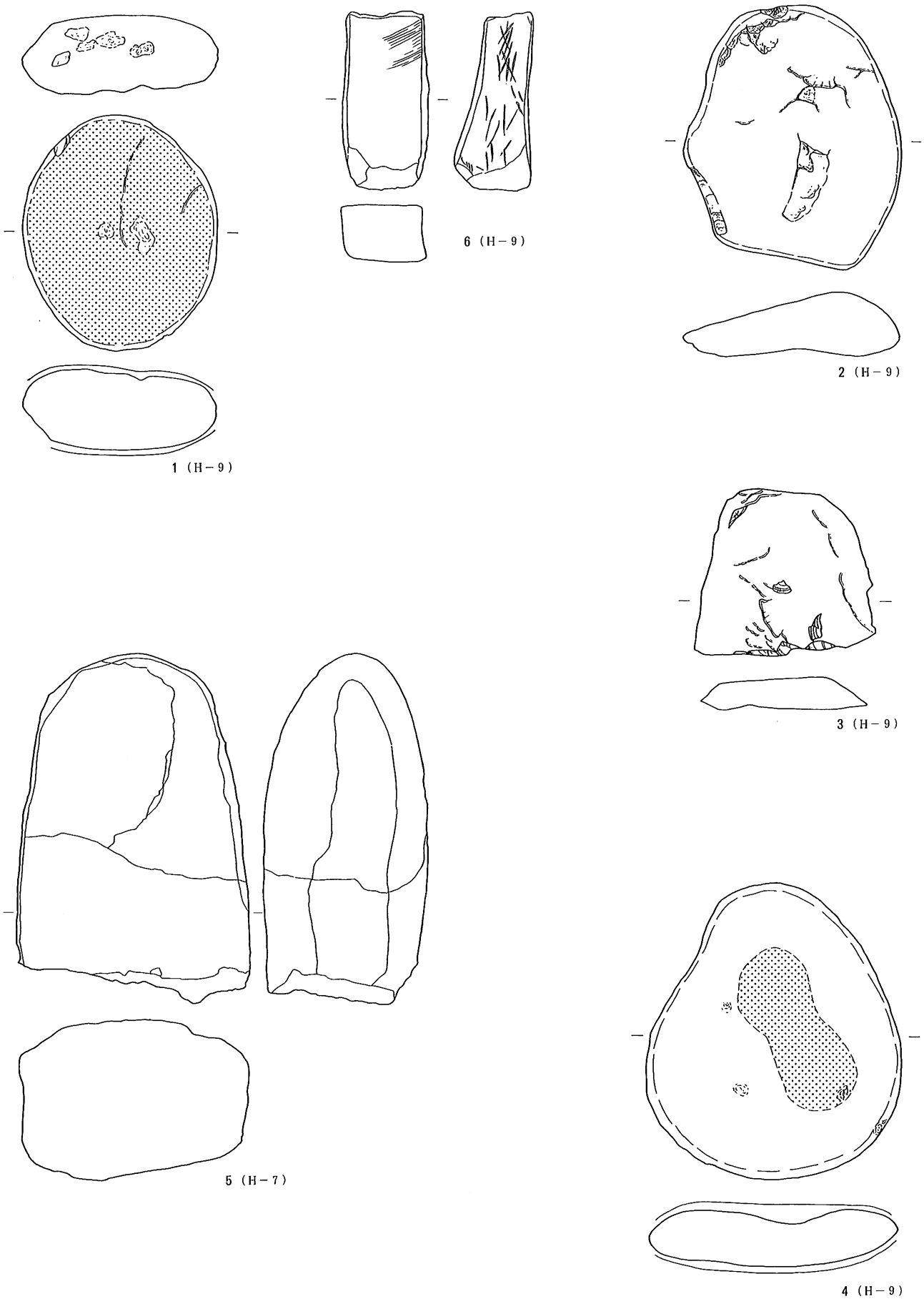
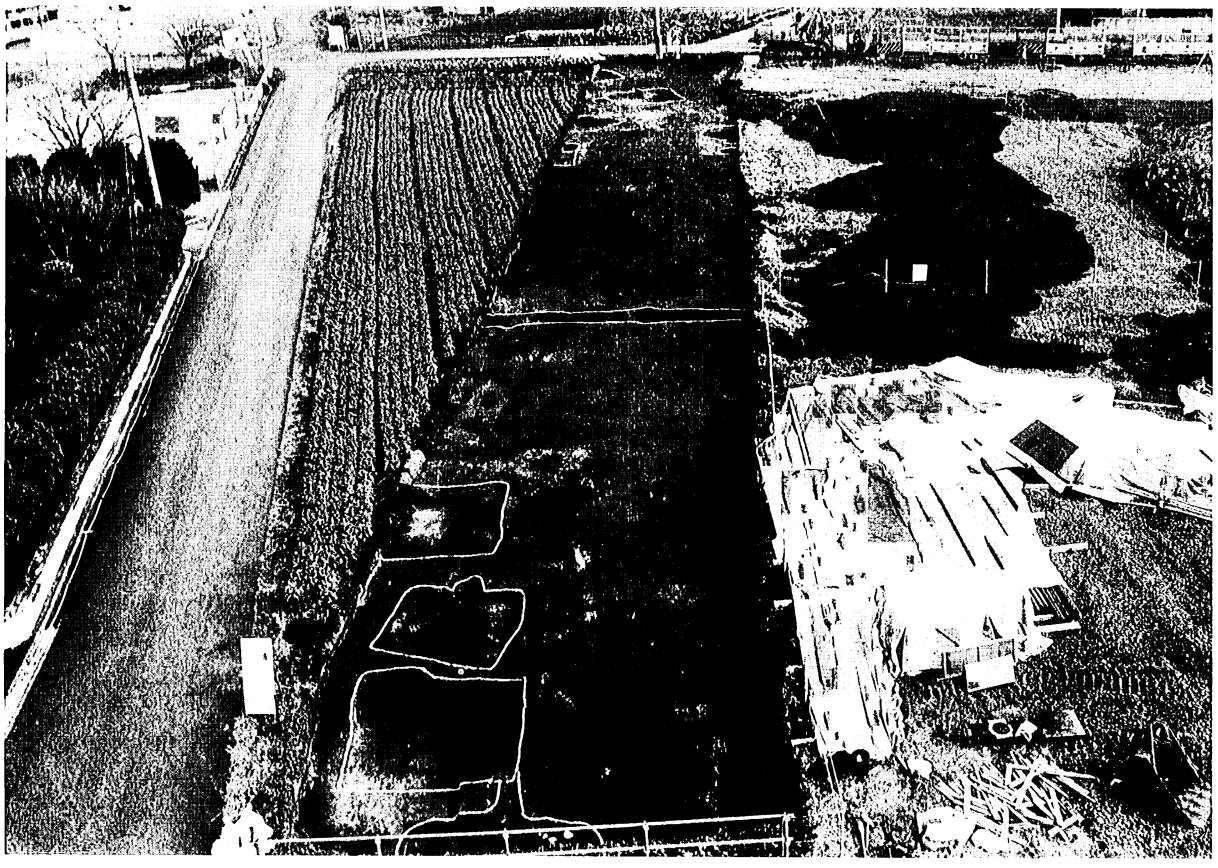
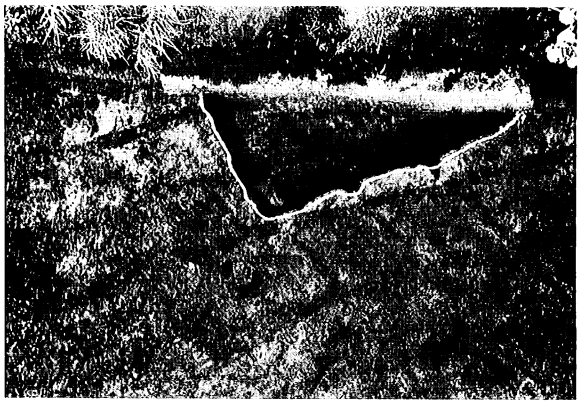


Fig. 13　石器

PL. 1



1．B区全景（西から）

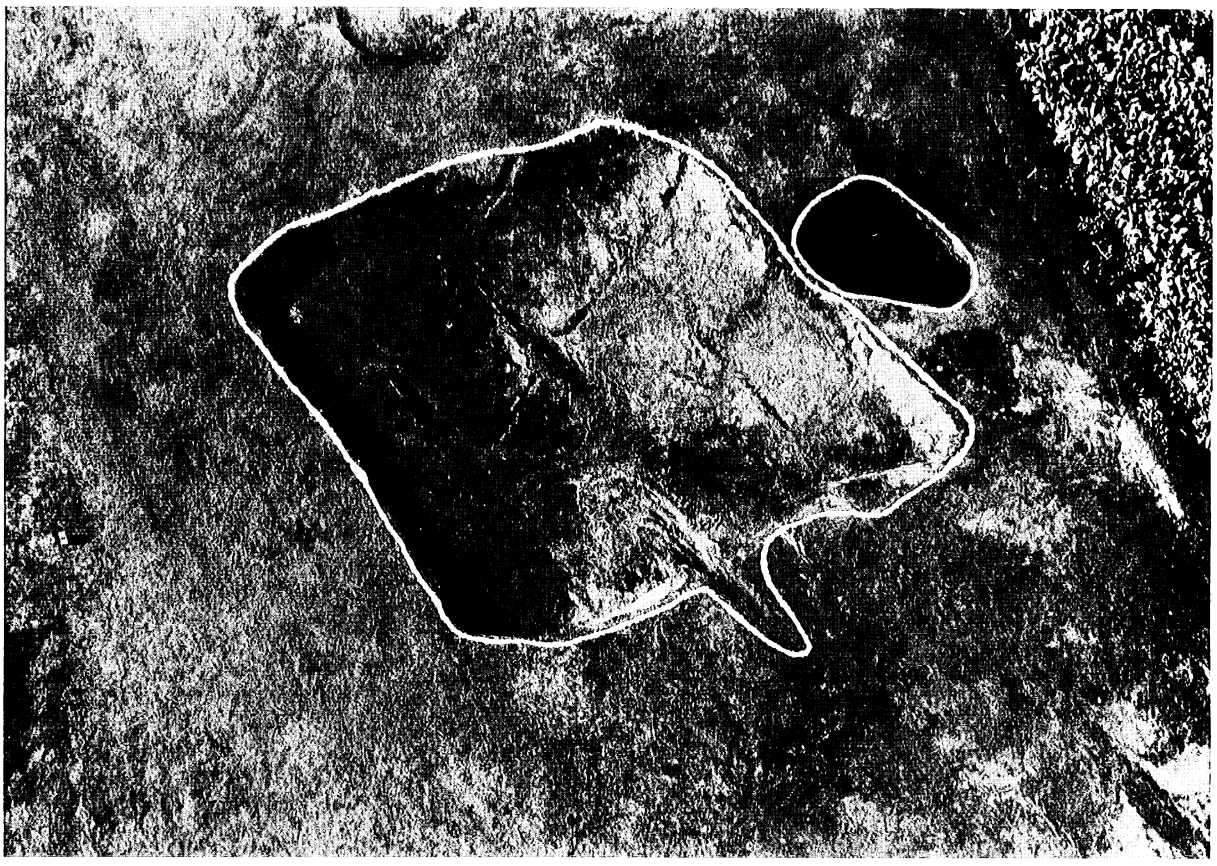


2．H－1号住居址（南から）

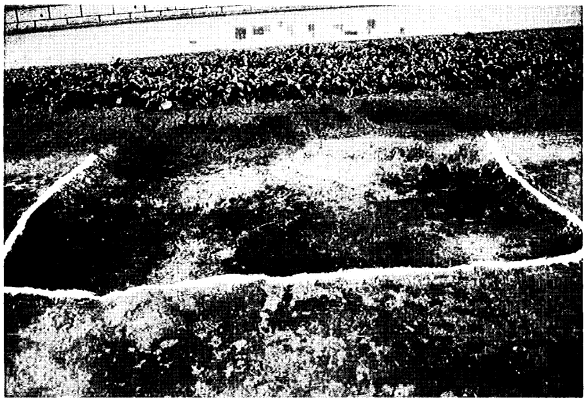
3．H－1号住居址出土遺物

4．H－2号住居址竈（西から）

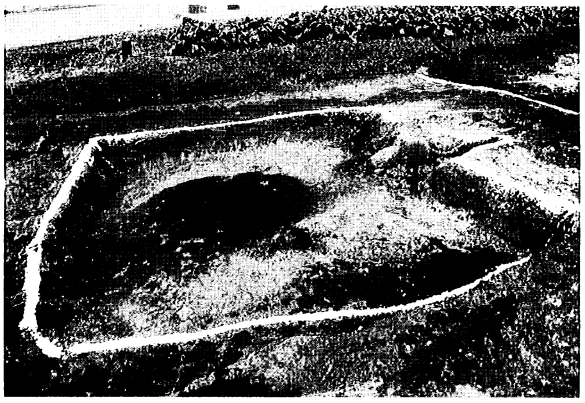
5．H－3号住居址深掘（西から）



1．H－2号住居址（東から）

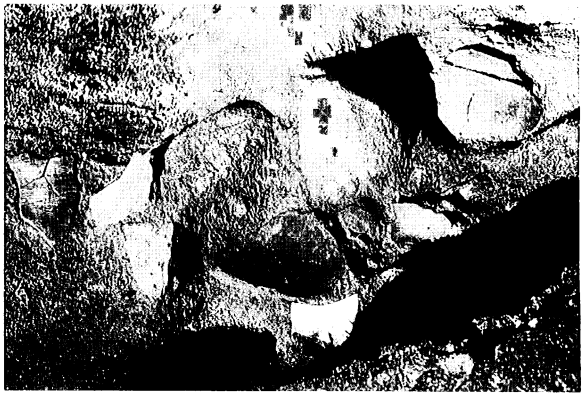


2．H－6号住居址（南から）

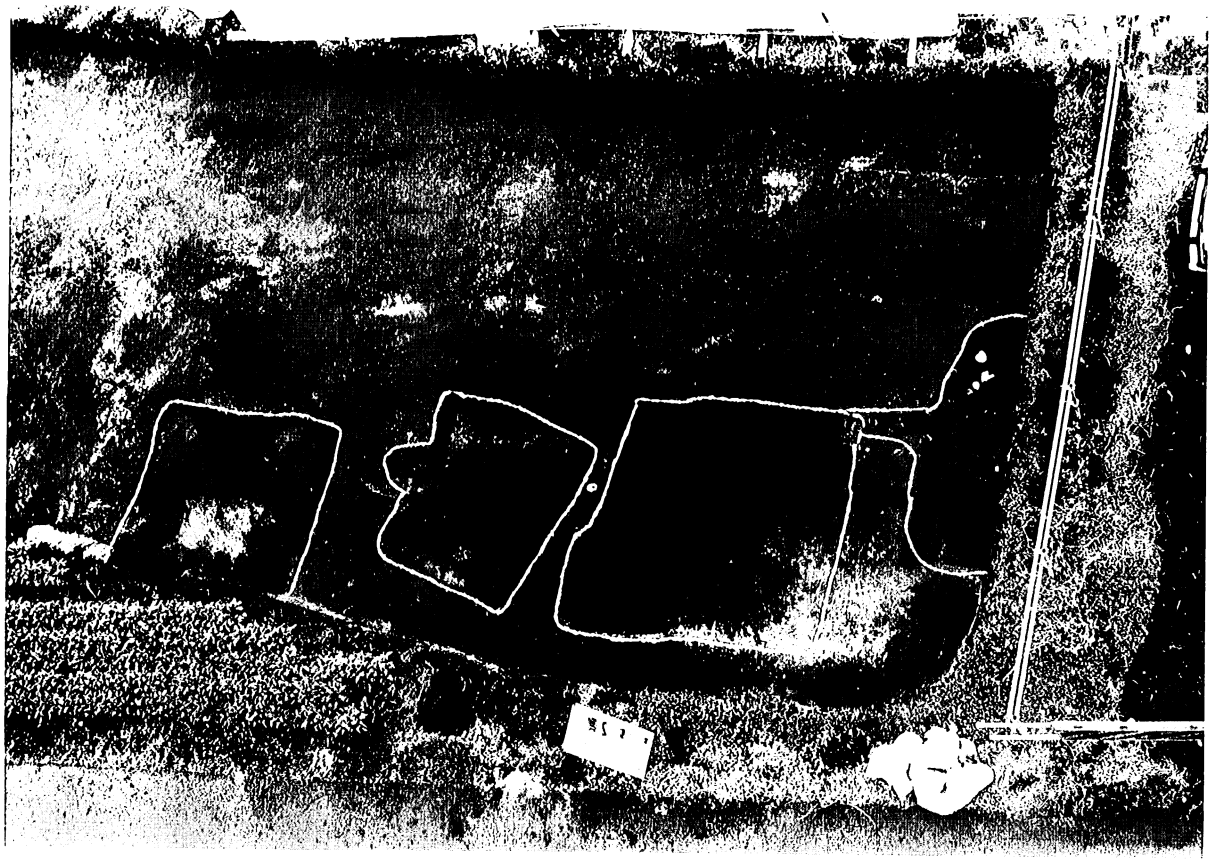


3．H－7号住居址（南から）

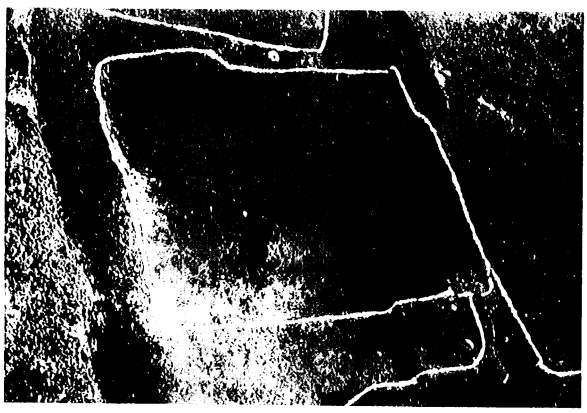
4．H－7号住居址竈（西から）



5．H－7号住居址出土遺物



1．H－6・7・8・9号住居址全景（北から）



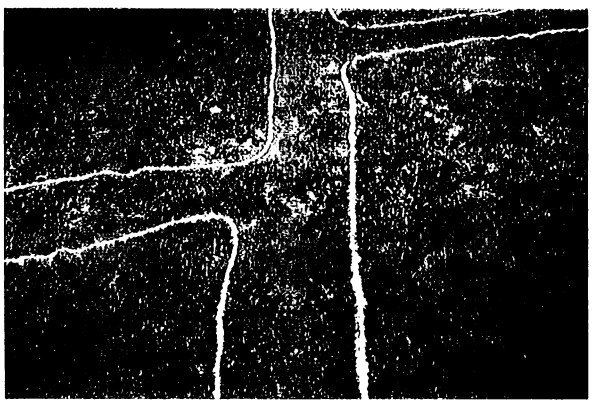
2．H－8号住居址（西から）

3．H－9号住居址（南から）

4．H－9号住居址竈（西から）

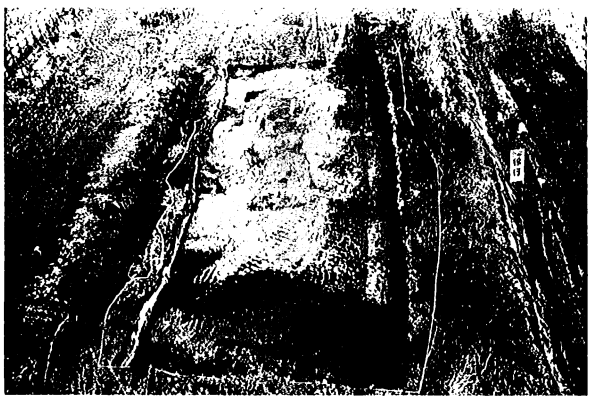
5．H－9号住居址出土遺物

1．C区全景（北から）



2．水田址畦畔

3．水田址セクション



4．D区全景

5．E区溝

PL. 5

1
(H－1)

2
(H－1)

3
(H－2)

4
(H－2)

5
(H－2)

7
(H－2)

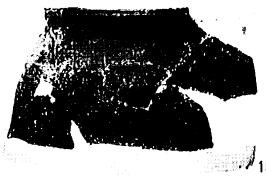
6
(H－2)

10
(H－2)

11
(H－2)

13
(H－6)

14
(H－6)



15
(H－6)

17
(H－7)

18
(H－7)

19
(H－7)

20
(H－7)

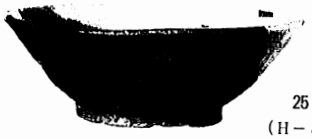
PL. 6

21
(H－7)

22
(H－7)

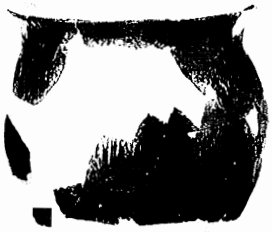
23
(H－7)

24
(H－8)



25
(H－8)

26
(H－8)



27
(H－8)

29
(H－9)

30
(H－9)

31
(H－9)

33
(W－1)

34
(X8Y4)

35
(X10Y4)

37
(X7Y5)

(石器)

抄　　録

フリガナ	ハギワラニイセキ
書名	萩原Ⅱ遺跡
副書名	北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻数	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	飯田祐二　佐藤則和
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371－0007　群馬県前橋市上泉町664－4
発行年月日	西暦1998年3月25日

フリガナ 所収遺物名	フリガナ 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ハギワラニ 萩原Ⅱ	マエバシシニノミヤマチ 前橋市二之宮町	10201	9E36	36° 20′54″	139° 10′ 14″	19971118 19971218	1,137㎡	北関東自動車道側道道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
萩原Ⅱ	集落址	古墳・平安時代	住居址　8軒	土師器・須恵器	
	水田址	平安時代	水田址　8枚		

萩原Ⅱ遺跡

平成10年3月17日　印　刷
平成10年3月25日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　027－231－9531
印刷所　松本印刷工業株式会社